薬 事・食品衛生審議会 医 薬 品 第 二 部 会 議 事 次 第

1. 開 会

2. 審議事項

[非公開案件]

- 議題1 医薬品オニバイド点滴静注43 mgの生物由来製品及び特定生物由来製品の 指定の要否、製造販売承認の可否及び再審査期間の指定並びに毒薬又は劇薬 の指定の要否について
- 議題2 医薬品ベレキシブル錠80 mgの生物由来製品及び特定生物由来製品の指定 の要否、製造販売承認の可否及び再審査期間の指定並びに毒薬又は劇薬の指 定の要否について
- 議題3 医薬品エンハーツ点滴静注用100 mgの生物由来製品及び特定生物由来製品の指定の要否、製造販売承認の可否及び再審査期間の指定並びに毒薬又は 劇薬の指定の要否について
- 議題4 医薬品ステボロニン点滴静注バッグ9000 mg/300 mLの生物由来製品及び特定生物由来製品の指定の要否、製造販売承認の可否及び再審査期間の指定並びに毒薬又は劇薬の指定の要否について
- 議題5 医薬品テプミトコ錠250 mgの生物由来製品及び特定生物由来製品の指定の 要否、製造販売承認の可否及び再審査期間の指定並びに毒薬又は劇薬の指定 の要否について
- 議題 6 医薬品デュピクセント皮下注300 mgシリンジの製造販売承認事項一部変更承認の可否及び再審査期間の指定について
- 議題7 医薬品ボンベンディ静注用1300の生物由来製品及び特定生物由来製品の指 定の要否、製造販売承認の可否及び再審査期間の指定並びに毒薬又は劇薬の 指定の要否について
- 議題8 レレバクタム水和物/イミペネム水和物/シラスタチンナトリウムを希少疾病用 医薬品として指定することの可否について
- 議題9 リツキシマブ (遺伝子組換え)を希少疾病用医薬品として指定することの可否に ついて

- 議題10 リツキシマブ (遺伝子組換え)を希少疾病用医薬品として指定することの可否に ついて
- 議題11 アレムツズマブ(遺伝子組換え)を希少疾病用医薬品として指定することの可否 について
- 議題12 オラパリブを希少疾病用医薬品として指定することの可否について

3. 報告事項

- 議題1 医薬品ヌーカラ皮下注用100 mgの製造販売承認事項一部変更承認について
- 議題2 医薬品リサイオ点滴静注液100 mgの製造販売承認事項一部変更承認について
- 議題3 医薬品ニンラーロカプセル2.3 mg、同カプセル3 mg及び同カプセル4 mgの製造販売承認事項一部変更承認について
- 議題4 医薬品ブスルフェクス点滴静注用60 mgの製造販売承認事項一部変更承認 について
- 議題5 医療用医薬品の承認条件について (オデフシィ配合錠) (ヨンデリス点滴静注用0.25 mg及び同点滴静注用1 mg)
- 議題 6 医療用医薬品の再審査結果について (ティーエスワン配合カプセルT20及び同配合カプセルT25) (セレコックス錠100 mg及び同錠200 mg) (ヒュミラ皮下注40 mgシリンジ0.8 mL及び同皮下注20 mg シリンジ0.4 mL) (ゾレア皮下注用75 mg及びゾレア同皮下注用150 mg) (サイモグロブリン点滴静注用25 mg) (オレンシア点滴静注用250 mg) (はしか風しん混合生ワクチン「第一三共」)

4. その他

議題1 最適使用推進ガイドラインについて (デュピクセント皮下注300 mgシリンジの最適使用推進ガイド ライン(案))

5. 閉 会

令和2年2月26日医薬品第二部会審議品目·報告品目一覧

No.	審議・ 報告	販売名 (会社名)	会社名	製造・輸入・製版別	承認·一 変別	成分名	効能・効果等	備考	再審査 期間	瘘·劇薬
1	審綫	オニバイド点滴静注43 mg	日本セルヴィエ ㈱	製販	承 認	イリノテカン塩 酸塩水和物 、	がん化学療法後に増悪した治 癒切除不能な膵癌を効能・効 果とする新効能・新剤形医薬 品	-	4 年	原体:劇薬 (指定済み) 製剤:劇薬 (指定済み)
2	寄護	ベレキシブル錠80 mg	小野薬品工業 (耕	製販	承認	チラブルチニ ブ塩酸塩	再発又は難治性の中枢神経系 原発リンパ腫を効能・効果とす る新有効成分含有医薬品	希少疾病 用医薬品	10年	原体:劇薬 (指定予定) 製剤:劇薬 (指定予定)
3	審議	エンハーツ点裔静注用100 mg	第一三共버	製販	承認	トラスツズマブ デルクステカ ン(遺伝子組 換え)	化学療法歴のあるHER2陽性 の手術不能又は再発乳癌(標 準的な治療が困難な場合に限 る)を効能・効果とする新有効 成分含有医薬品	条件付き 早期承認	8年	原体:劇薬 (指定予定) 製剤:劇薬 (指定予定)
4	審議	ステボロニン点滴静注バッグ9000 mg/300 mL	ステラファーマ機	製販	承認	ボロファラン (¹⁸ B)	切除不能な局所進行又は局所 再発の頭頭部癌を効能・効果 とする新有効成分含有医薬品	先駆け審 査	8年	原体:非該当 製剤:非該当
5	審議	テプミトコ錠250 mg	メルクバイオ ファーマ(附	製販	承認	テポチニブ塩酸塩水和物	MET遺伝子エクソン14スキッピング変異陽性の切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌を効能・効果とする新有効成分含有医薬品	先駆け審 査 希少疾病 用医薬品	10年	原体:劇薬 (指定予定) 製剤:劇薬 (指定予定)
6	審議	デュピクセント皮下注300 mgシリンジ	サノフィ術	製販	一変	デュピルマブ (遺伝子組換 え)	鼻茸を伴う慢性副鼻腔炎(既存治療で効果不十分な患者に限る)を効能・効果とする新効能・新用量医薬品	The second secon	残余 (令和8 年1月 18日ま で)	原体:劇薬 (指定済み) 製剤:劇薬 (指定済み)
7	審議	ボンベンディ静注用1300	シャイアー・ジャ パン(情	製販	承認	ボニコグ ア ルファ(遺伝 子組換え)	von Willebrand病患者における 出血傾向の抑制を効能・効果 とする新有効成分含有医薬品	希少疾病 用医薬品		原体:非該当 製剂:非該当

No.	審議· 報告	販売名 (会社名)	会社名	製造・輸 入・製版 別	承認·一 変別	成分名	効能·効果等	備考	再審査 期間	毒·劇薬
8	報告	ヌーカラ皮下注用100 mg	グラクソ・スミスク ライン锅	製販	一 変	メポリズマブ (遺伝子組換 え)	気管支喘息(既存治療によっても喘息症状をコントロールできない難治の患者に限る)を効能・効果とし、小児用量を追加する新用量医薬品	₩	残余 (令和6 年3月 27日ま で)	原体:劇薬 (指定済み) 製剤:劇薬 (指定済み)
9	報告	リサイオ 点滴静注液100 mg	大日本住友製 薬㈱	製販	— 変	チオテバ	悪性リンパ腫における自家造 血幹細胞移植の前治療を効 能・効果とする新効能・新用量 医薬品	****	残余 (令和9 年3月 25日ま で)	原体:劇薬 (指定済み) 製剤:劇薬 (指定済み)
10	報告	ニンラーロカプセル2.3 mg 同 カプセル 3 mg 同 カプセル 4 mg	武田薬品工業 (樹	製製製販販販	一変変変	イキサゾミブク エン酸エステ ル	多発性骨髄腫における自家造血幹細胞移植後の維持療法を 効能・効果とする新効能・新用 量医薬品	-	残余 (令和9 年3月 29日ま で)	原体: 毒薬 (指定済み) 製剤: 毒薬 (指定済み)
11	報告	ブスルフェクス点滴静注用60 mg	大塚製薬㈱	製販	一 変	プスルファン	悪性リンパ腫における自家造血幹細胞移植の前治療を効能・効果とする新効能・新用量 医薬品	事前評価 済公知申 請		原体:劇薬 (指定済み) 製剤:劇薬 (指定済み)

.

.

申請。者	阪 売 名	新規/一部変更
日本セルヴィエ (株)	オニバイド点滴静注 43 mg	新規
一般名	イリノテカン塩酸塩水和物	
効能・効果	がん化学療法後に増悪した治癒切除不能な膵癌	
用法·用量	フルオロウラシル及びレボホリナートカルシウムとの併用に 人にはイリノテカンとして1回70 mg/m²(体表面積)を90% 隔で点滴静注する。なお、患者の状態により適宜減量する。	. –
申請区分	1-(4)新効能医薬品、1-(5)新剤形医薬品	
再審查期間	4年	
審查等経過	・承認申請(平成 31 年 3 月 22 日)	
承認条件	RMP	

【対象疾患】

- ・がん化学療法後に増悪した治癒切除不能な膵癌。
- ・本邦における 2018 年の膵癌の罹患数は 4 万人と推定されている (がんの統計委員会, がんの統計 計 (2017 年版))。

【開発の経緯】

・イリノテカン塩酸塩水和物(以下、「CPT-11」)をリポソームに封入した製剤である。

【作用機序・特徴】

- ・CPT-11 は、I型トポイソメラーゼを阻害することにより、腫瘍増殖抑制作用を示すと考えられている。
- ・本剤は、CPT-11 をリポソームに封入することにより、CPT-11 の血中滞留性の向上等を期待して 開発された。

【類薬】〔製剤名(一般名)〕

|ゲムシタビン塩酸塩を含む化学療法後に増悪した治癒切除不能な膵癌において用いられる。|

- ・ティーエスワン配合カプセル(テガフール・ギメラシル・オテラシルカリウム配合剤)
- ・オキサリプラチン、フルオロウラシル(以下、「5-FU」)及びレボホリナートカルシウム(以下、「*1-*LV」)の併用投与
- ・5-FU、I-LV、CPT-11 及びオキサリプラチンの併用投与

【海外の開発状況】

・2019年10月末時点において、本剤は膵癌に関する効能・効果で米国及びEUを含む9の国又は 地域において承認されている。

申請者	版 売 名	新規/一部変更				
小野薬品工業㈱	小野薬品工業㈱ ベレキシブル錠 80 mg					
一般名	チラブルチニブ塩酸塩					
効能・効果	再発又は難治性の中枢神経系原発リンパ腫					
用法·用量	用 法 ・ 用 歴					
申 請 区 分	区 分 1-(1) 新有効成分含有医薬品					
再審查期間	間 10年					
審查等経過	審 套 等 経 過 ・ 承認申請 (令和元年 8 月 28 日)					
承認条件	RMP、市販直後調査、全例調査					
その他	希少疾病用医薬品(令和元年 8 月 20 日付薬生薬審発 0820 第	3 号)				

【対象疾患】

- 再発又は難治性の中枢神経系原発リンパ腫(以下、「PCNSL」)患者(当該患者に対する標準的 治療は確立されていない)。
- 脳腫瘍全国集計の報告(Jpn J Neurosurg 2015; 24: 699-704)では、本邦における原発性脳腫瘍の 患者数は年間約 20,000 人と推定され、うち、PCNSL の割合は約 4.9%と報告されていること (Neurol Med Chir 2017; 57: 9-102)から、PCNSL の年間発症者数は約 980 人と推定され、再発 又は難治性の患者はさらに限定される。

【開発の経緯】

• チラブルチニブ塩酸塩(以下、「本薬」)は、申請者により創製された、ブルトン型チロシンキナーゼ(以下、「BTK」)阻害剤である。

【作用機序・特徴】

• 本薬は、B 細胞に発現する B 細胞受容体 (BCR) の下流シグナル伝達分子である BTK と結合 し、BTK のキナーゼ活性を阻害することにより、B 細胞性腫瘍の増殖等を抑制すると考えられている。

【類薬】〔製剤名(一般名)〕

BTK 阻害薬(本薬と効能・効果が異なる)

製剤名	一般名
イムブルビカカプセル	イブルチニブ

PCNSL に対する主な治療薬(本薬と作用機序及び効能・効果の一部が異なる)

製剤名	一般名
メソトレキセート点滴静注液	メトトレキサート
リツキサン点滴静注	リツキシマブ(遺伝子組換え)

【海外の開発状況】

▶ 2019年11月時点において、本薬が承認されている国又は地域はない。

	□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □	の云一番説・報古		
申 請 者	阪 売 名	新規/一部変更		
第一三共㈱	エンハーツ点滴静注用 100 mg	新規		
一般名	トラスツズマブ デルクステカン (遺伝子組換え)			
効能・効果	化学療法歴のある HER2 陽性の手術不能又は再発乳癌 (標準的場合に限る)	的な治療が困難な		
通常、成人にはトラスツズマブ デルクステカン (遺伝子組換え) として 用 法 ・ 用 量 5.4 mg/kg (体重) を 90 分かけて 3 週間間隔で点滴静注する。なお、初回の の忍容性が良好であれば 2 回目以降の投与時間は 30 分間まで短縮できる。				
申請区分	申 請 区 分 1-(1) 新有効成分含有医薬品			
再審查期間	再審查期間 8年			
審查等経過	・承認申請(令和元年9月9日)			
RMP、市販直後調査、全例調査 化学療法歴のある HER2 陽性の手術不能又は再発乳癌患者を対象に 第Ⅲ相試験における本剤の有効性及び安全性について、医療現場に適り 提供すること。				
その他	条件付き早期承認制度適用医薬品			

【対象疾患】

- トラスツズマブ エムタンシン(遺伝子組換え)(以下、「T-DM1」)による治療歴のあるヒト 上皮増殖因子受容体(以下、「HER」)2陽性の手術不能又は再発乳癌患者(HER2陽性の手術 不能又は再発乳癌患者に対する一次治療としてトラスツズマブ(遺伝子組換え)及びタキサン 系抗悪性腫瘍剤を含む化学療法等、二次治療としてT-DM1等が推奨されている)。
- 本邦における乳癌の年間罹患数は約9万人(がんの統計2017年版(公益財団法人がん研究振興財団))、このうち約20%がHER2陽性とされている(Chemother Res Pract. 2012; 743193等)。

【開発の経緯】

• トラスツズマブ デルクステカン (遺伝子組換え) (以下、「本薬」) は、抗体薬物複合体であり、HER2 に対する IgG1 サブクラスのヒト化モノクローナル抗体である MAAL-9001 とトポイソメラーゼ I 阻害作用を有するエキサテカン誘導体である MAAA-1181a がペプチドリンカーを介して結合している。

【作用機序・特徴】

- 本薬は、腫瘍細胞の細胞膜上に発現する HER2 に結合し、細胞内に取り込まれた後にリンカー が加水分解され、遊離した MAAA-1181a が DNA 傷害作用及びアポトーシス誘導作用を示す こと等により、腫瘍の増殖を抑制すると考えられている。
- ・ ①高い薬物抗体比、②血中での高い安定性、③MAAA-1181aが高い膜透過性を有することから本薬が結合していない近隣の腫瘍細胞に対しても腫瘍増殖抑制効果を示す等の特性を有する。

【類薬】〔製剤名(一般名)〕

• HER2 を標的とする薬剤(本薬と作用機序及び効能・効果の一部が異なる)

製剤名	一般名
ハーセプチン注射用	トラスツズマブ(遺伝子組換え)
カドサイラ点滴静注用	トラスツズマブ エムタンシン (遺伝子組換え)
タイケルブ錠	ラパチニブトシル酸塩水和物

【海外の開発状況】

• 2019 年 12 月時点において、HER2 陽性の手術不能又は再発乳癌に関する効能・効果にて、米 国のみで承認されている。

申請者	版 売 名	新規/一部変更				
ステラファーマ (株)	ステボロニン点滴静注バッグ 9000 mg/300 mL					
一般名	ボロファラン (¹⁰ B)					
効能・効果	切除不能な局所進行又は局所再発の頭頭部癌					
用法・用量	通常、成人にはボロファラン(10B)として、1 時間あたり 200 mg/kg の速度で 2 時間点滴静注する。その後、病巣部位への中性子線の照射を開始し、照射中 は 1 時間あたり 100 mg/kg の速度でボロファラン(10B)を点滴静注する。					
申 請 区 分	1- (1) 新有効成分含有医薬品					
再審查期間	再審查期間 8年					
審查等経過	• 承認申請(令和元年 10 月 15 日)					
承認条件	RMP、市販直後調査、全例調査					
その他	先駆け審査指定医薬品 (第 2 回指定品目)					

概。要

【対象疾患】

• 切除不能な局所進行又は局所再発の頭頸部癌患者(当該患者に対して、ニボルマブ(遺伝子組換え)、セツキシマブ(遺伝子組換え)等による治療が行われている)。本邦における口腔・咽頭癌及び喉頭癌(上皮内癌を除く)の罹患数は、それぞれ 21,601 及び 5,285 人(厚生労働省平成 28 年全国がん登録 罹患数・率報告)であると報告されている。なお、頭頸部癌のうち、86.9%が口腔、咽頭又は喉頭癌であると報告されている(日本頭頸部癌学会 2016 年頭頸部惡性腫瘍全国登録)。

【開発の経緯】

ボロファラン(¹⁰B)(以下、「本薬」)は、フェニルアラニン誘導体である 4-ボロノ-L-フェニルアラニンに含まれるホウ素中の ¹⁰B の存在比を高めた薬剤である。

【作用機序・特徴】

・ 体外より中性子線を照射することで腫瘍細胞に取り込まれた ¹⁰B から発生するアルファ線及 びリチウム原子核による殺細胞効果を期待するホウ素中性子補足療法(以下、「BNCT」)に用 いられる。

【類薬】〔製剤名(一般名)〕

・ 切除不能な局所進行又は局所再発の頭頸部癌に対して使用される主な薬剤(本薬と作用機序

が異なる薬剤も含む)

製剤名	一般名
オプジーボ点滴静注	ニボルマブ(遺伝子組換え)
アービタックス注射液	セツキシマブ(遺伝子組換え)

【海外の開発状況】

• 2019年11月時点において、本薬が承認されている国又は地域はない。

申請者	阪 売 名	新規/一部変更		
メルクバイオフ ァーマ(株)	テプミトコ錠 250 mg	新規		
一般名	テポチニブ塩酸塩水和物			
効能 ,効果	MET 遺伝子エクソン 14 スキッピング変異陽性の切除不能な過 細胞肺癌	進行・再発の非小		
用法,用最	通常、成人にはテポチニブ塩酸塩水和物として1回 500 mg を経口投与する。なお、患者の状態により適宜減量する。	を1日1回食後に		
申請区分	申 請 区 分 1-(1) 新有効成分含有医薬品			
再審查期間	10年	and the state of t		
審 套 等 経 過	・承認申請(令和元年 11 月 12 日)			
承認条件	RMP、市販直後調査、全例調査			
その他	希少疾病用医薬品(令和元年 11 月 19 日付け薬生薬審発 1119 先駆け審査指定医薬品(第三回指定品目)	9 第 1 号)		

【対象疾患】

- 間葉上皮転換因子(以下、「MET」)遺伝子エクソン 14(以下、「METex14」)スキッピング変 異陽性の切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌(以下、「NSCLC」)。
- 本邦における 2017 年の肺癌の総患者数は 169,000 人と報告されている(厚生労働省における 患者調査)。また、肺癌患者全体に占める非小細胞肺癌患者の割合は約 85%であること(Mayo Clin Proc 2008; 83: 584-94)、及び *MET* 遺伝子のエクソン 14 にスキッピング変異(以下、 「METex14 スキッピング変異」)を有する患者は NSCLC 患者の約 3%と報告(J Clin Oncol 2016; 34: 721-30 等)されていることから、本邦における METex14 スキッピング変異陽性の NSCLC 患者数は約 5,000 人と推測される。

【作用機序・特徴】

MET のチロシンキナーゼを阻害する低分子化合物であり、MET のリン酸化を阻害し、下流の シグナル伝達分子のリン酸化を阻害することにより、METex14 スキッピング変異を有する NSCLC に対して腫瘍増殖抑制作用を示すと考えられている。

【類薬】〔製剤名(一般名)〕

• METex14 スキッピング変異を標的とした既承認薬はない。

【海外の開発状況】

2019年11月末時点において、本薬が承認された国又は地域はない。

申請者	版 売 名	新規/一部変更		
サノフィ(株)	デュピクセント皮下注 300mg シリンジ	一部変更		
一般 名	デュピルマブ(遺伝子組換え)			
	既存治療で効果不十分なアトピー性皮膚炎			
勃 能 • 勃 果	気管支喘息 (既存治療によっても喘息症状をコントロールでき 治の患者に限る)	きない重症又は難		
	 鼻茸を伴う慢性副鼻腔炎(既存治療で効果不十分な患者に限	み)		
	李子·C日 人区区的杂班人(2011 1170)(2017 1170)(2017 1170)	(下線部追加)		
	アトピー性皮膚炎			
	通常、成人にはデュピルマブ(遺伝子組換え)として初回に 6	00mg を皮下投与		
し、その後は1回300mgを2週間隔で皮下投与する。				
	気管支喘息			
	通常、成人及び 12 歳以上の小児にはデュピルマブ(遺伝子紀)	11換え)として初		
用法・用量	回に 600mg を皮下投与し、その後は 1 回 300mg を 2 週間隔で	で皮下投与する。		
	<u>鼻茸を伴う慢性副鼻腔炎</u>			
	通常、成人にはデュピルマブ(遺伝子組換え)として1回30	00 mg を 2 週間隔		
	で皮下投与する。なお、症状安定後には、1回 300 mg を 4 週	間隔で皮下投与		
	<u>できる。</u>	(下線部追加)		
申請区分	1- (4) 新効能医薬品、1- (6) 新用量医薬品			
再審查期問	残余(令和8年1月18日まで)			
審查等経過	・承認申請(平成 31 年 4 月 25 日)			
承認条件	RMP、市販直後調査	114		
その他	最適使用推進 GL 作成対象医薬品			

【対象疾患】

- 副鼻腔炎は、嗅覚障害、頭痛等を伴い、鼻閉、鼻漏、咳嗽等の呼吸器症状を呈する疾患であり、3カ月以上呼吸器症状が持続するものが慢性副鼻腔炎とされている。
- ・ 鼻茸を伴う慢性副鼻腔炎(CRSwNP)の治療として、生理食塩水による鼻洗浄、局所ステロイド薬及び経口ステロイド薬があり、これらの治療によっても奏効しない場合には内視鏡下鼻 副鼻腔手術等の外科療法が施行される。しかしながら、CRSwNPの再燃、効果が限定的等であ

ることから、CRSwNP 難治例における副鼻腔炎症に対する長期投与可能な全身治療薬が必要とされている。本邦における慢性副鼻腔炎の患者数は、厚生労働省の患者調査(平成29年)から22.9万人と推計されており、このうち鼻茸を有する患者は約20%とされている(副鼻腔炎診療の手引き)ことから、CRSwNP患者は約4.6万人と推定される。

【開発の経緯】

- ・ IL-4 受容体及び IL-13 受容体を構成する IL-4 受容体 α サブユニット (IL-4Rα) に対するヒト IgG4 モノクローナル抗体であり、これまでにアトピー性皮膚炎及び気管支喘息に係る効能・ 効果で承認されている。
- 今般、製造販売承認事項一部変更承認申請が行われた。

【作用機序・特徴】

- IL-4 受容体及び IL-13 受容体を構成する IL-4Rα に対するヒト IgG4 モノクローナル抗体であり、IL-4Rα に結合することで、IL-4 及び IL-13 シグナル伝達経路を阻害する。
- · CRSwNP に対する初の生物製剤である。

【類薬】〔製剤名 (一般名)〕

・ 現在、経口ステロイド薬や手術などの既存治療でも効果不十分な CRSwNP に対する薬剤は承認されていない。

副鼻腔炎・鼻茸治療薬(経口ステロイド薬)

· プレドニン錠 5mg 他 (プレドニゾロン) など

【海外の開発状況】

CRSwNP に対して、2019年6月に米国で承認されている。

申請者	阪 売 名	新規/一部変更
シャイアー・ジ ャパン (株)	ボンベンディ静注用 1300	新規
一般名	ボニコグ アルファ (遺伝子組換え)	
効能・効果	von Willebrand 病患者における出血傾向の抑制	
用法・用量	本剤を添付の溶解液 10 mL で溶解し、4 mL/分を超えない速度に注射する。通常、18 歳以上の患者には、体重 1 kg 当たり 40 投与するが、患者の状態に応じて適宜増減する。	
申請区分	1- (1) 新有効成分含有医薬品	:
再審查期間	10 年	
審查等経過	・承認申請(令和元年7月22日)	
承認条件	RMP、市販直後調査、全例調査	
その他	希少疾病用医薬品(平成 24 年 3 月 19 日付け薬食審査発 0319 血液製剤代替医薬品に該当、生物学的製剤基準及び検定告示	

【対象疾患】

- von Willebrand 病 (以下、「VWD」) は von Willebrand 因子 (以下、「VWF」) の質的異常又は量的欠損に起因する遺伝性出血性疾患であり、鼻出血や皮下出血などの症状を呈する。
- VWD の患者数は 1325 人(血液凝固異常症全国調査平成 30 年度報告書(公益財団法人エイズ 予防財団))、血漿由来 VWF/血液凝固第 VIII 因子製剤の治療を受けている患者はそのうち約 46%(500人程度)(血栓止血誌 19:311-18,2008)。

【開発の経緯】

・ ボニコグ アルファ (遺伝子組換え) (以下、「本薬」) は、遺伝子組換え VWF であり、VWD 患者に対する補充療法への使用を目的として開発された。

【作用機序・特徴】

- ・ VWF は、血液凝固因子の一つであり、血管障害部位に血小板が粘着・凝集する初期止血反応 (一次止血) での接着因子として機能するとともに、血液凝固第 VIII 因子(以下、「FVIII」) のキャリヤー蛋白としてその凝固活性の発現・保持に関与している。
- 本薬の投与により、血漿中のVWFを補充し、機能不全に陥っていた血液凝固カスケードを進行させ、止血を誘導する。

【類薬】〔製剤名(一般名)〕

<血漿由来 VWF/血液凝固第 VIII 因子製剤>

- コンファクトF注射用 250/500/1000(乾燥濃縮人血液凝固第 VIII 因子)
- コンコエイト-HT(乾燥濃縮人血液凝固第 VIII 因子)

<バソプレシン誘導体製剤>

デスモプレシン注4協和(デスモプレシン酢酸塩水和物)

【海外の開発状況】

2015年12月に米国で承認されて以降、欧州を含む34の国又は地域で承認されている(2019年

12	月	珥	在),
14	/1	776	الملا

Ţ

申。請。者	贩 売 名	新規/一部変 更
グラクソ・スミ		
スクライン	ヌーカラ皮下注用 100 mg	一部変更
(株)		
一 般 名	メポリズマブ(遺伝子組換え)	
	① 気管支喘息(既存治療によっても喘息症状をコントロールで	できない難治の
効能・効果	患者に限る)	
	② 既存治療で効果不十分な好酸球性多発血管炎性肉芽腫症	
	① 気管支喘息	-
1	 通常、成人及び 12 歳以上の小児にはメポリズマブ(遺伝子維	l換え)として 1
	 回 100 mg を 4 週間ごとに皮下に注射する。	
	通常、6 歳以上 12 歳未満の小児にはメポリズマブ(遺伝子経	l換え)として 1
用法·用量	回 40 mg を 4 週間ごとに皮下に注射する。	
/10 Jan /10 mts	② 好酸球性多発血管炎性肉芽腫症	#
• .	通常、成人にはメポリズマブ(遺伝子組換え)として1回30	0 mg を 4 週間ご
	とに皮下に注射する。	
		(下線部追加)
申請区分	1-(6)新用量医薬品	
再審查期間	残余(令和6年3月27日まで)	
審查等経過	・承認申請(平成31年3月28日)	
承認条件	RMP	

概要

【対象疾患】

- ・気管支喘息は、気道の慢性炎症、気道狭窄及び可逆性の気道閉塞を特徴とする多様な慢性肺疾患である。
- ・総務省統計局の人口推計データ(平成30年10月1日現在)及び平成30年度学校保健統計調査 のデータに基づく本邦における6~11歳の小児喘息患者数は221,113人である。

【開発の経緯】

- ・本剤の有効成分であるメポリズマブ(遺伝子組換え)(以下、「本薬」) は、ヒト免疫グロブリン G1 (IgG1) サブクラスのヒト化抗ヒトインターロイキン-5 (以下、「IL-5」) モノクローナル抗体 である。
- ・本邦において、本剤は2016年3月に12歳以上の小児及び成人に対して「気管支喘息(既存治療によっても喘息症状をコントロールできない難治の患者に限る)」を効能・効果として承認されている。
- ・今般、6~11歳の小児重症喘息患者に対する用法・用量を追加する製造販売承認事項一部変更承認申請がなされた。

【作用機序·特徴】

・ヒト化抗ヒト IL-5 モノクローナル抗体

【類薬】〔製剤名(一般名)〕

同一の効能・効果を有し、小児に対する用法・用量が承認されている医薬品

・ゾレア皮下注用 75 mg、同皮下注用 150 mg、同皮下注用 75 mg シリンジ、同皮下注用 150 mg シリンジ

【海外の開発状況】

・欧州では2018年8月に、米国では2019年9月に、6~11歳の小児重症喘息患者に対して本邦申 請用法・用量と同用量で承認済みである。

申	売 名 新規/一部変更	
十口木仕方制革		
人口本任及聚衆 リサイオ点滴静注液 100 r	mg · 一部変更	
(株)		
ー 般 名 チオテパ		
小児悪性国形腫瘍下記疾	<u>患</u> における自家造血幹細胞移植の前治療	
効能・効果 悪性リンパ腫、小児悪性	固形腫瘍	
	(下線部追加、取消線部削除)	
1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 -	自家造血幹細胞移植の前治療>	
지수 민준은 이 아들이 이 아니는 그 그 그 그 그 그 그 그 그 그 그 그 그 그 그 그 그 그 그	おいて、通常、成人にはチオテパとして 1 日 1 回 5	
•	<u> 商静注し、これを2日間連続で行う。なお、患者の状</u>	
	態により適宜減量する。	
	< 小児悪性固形腫瘍における自家造血幹細胞移植の前治療 > 1 1 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	
I and a second control of the contr	メルファランとの併用において、通常、チオテパとして1日1回200 mg/m²を	
	24 時間かけて点滴静注する。これを2日間連続で行い、5日間休薬した後、さらに同用量を2日間連続で行う。なお、患者の状態により適宜減量する。	
りに同用里を2日間建称	(下線部追加)	
申 請 区 分 1- (4) 新効能医薬品、1-	- (6) 新用重医条位	
再審査期間 残余(令和9年3月25日	残余(令和9年3月25日まで)	
審查等経過 • 承認申請(平成31年	• 承認申請(平成31年3月29日)	
承認条件 RMP		
そ の 他 未承認薬・適応外薬検討	会議開発要請品目	

【対象疾患】

- 自家造血幹細胞移植(以下、「HSCT」)の施行対象となる悪性リンパ腫(悪性リンパ腫に対する自家 HSCT の前治療として確立された大量化学療法はない)。
- 全国調査報告書(日本造血細胞移植学会 平成30年度)によると、本邦における悪性リンパ 腫患者の自家造血細胞移植件数は918件であり、チオテパ(以下、「本薬」)の投与対象とな る成人の悪性リンパ腫患者の移植件数はさらに限定される。

【開発の経緯】

本薬は、エチレンイミン系のアルキル化剤である。

【作用機序・特徴】

本薬は、腫瘍細胞の DNA をアルキル化し、DNA 合成を阻害すること等により、腫瘍の増殖を 抑制すると考えられている。

【類薬】〔製剤名 (一般名)〕

悪性リンパ腫における自家造血幹細胞移植の前治療を効能・効果とする薬剤(本薬と効能・効

果の一部が異なる)

製剤名	一般名
注射用エンドキサン	シクロホスファミド水和物
アルケラン静注用	メルファラン

注) ブスルフェクス点滴静注用 (ブスルファシ) は、悪性リンパ腫における自家造血幹細胞移植の前治療に係る効能・効果で審査中 (事前評価済公知申請) であり、令和 2 年 2 月の医薬品第二部会において報告予定。

【海外の開発状況】

• 2019年11月時点において、悪性リンパ腫における自家 HSCT の前治療に関する効能・効果にて、36の国又は地域で承認されている。なお、EUでは、2010年3月に承認された。

	###NICUENIA — [1]	日本 競職 [1]
申書者	阪 売 名	新規/一部変更
武田薬品工業㈱	ニンラーロカプセル 2.3 mg、同カプセル 3 mg、同カプセル 4	一部変更
成田来的 上来(m)	mg	4000人
一般名	イキサゾミブクエン酸エステル	
	再発又は難治性の多発性骨髄腫	,
効能・効果	多発性骨髄腫における自家造血幹細胞移植後の維持療法	
		(下線部追加)
	<u>〈再発又は難治性の多発性骨髄腫〉</u>	
	レナリドミド及びデキサメタゾンとの併用において、通常、原	戍人にはイキサゾ
	ミブとして1日1回4mgを空腹時に週1回、3週間(1、8及	:び15日目)経口
	投与した後、13 日間休薬(16~28 日目) する。この 4 週間を	1サイクルとし、
	投与を繰り返す。なお、患者の状態により適宜減量する。	
用法・用量	<u>〈多発性骨髄腫における自家造血幹細胞移植後の維持療法〉</u>	:
/ii (25 / / / / / / / / / / / / / / / / / / /	通常、成人には1日1回、本薬を空腹時に週1回、3週間(1	、8 及び 15 日目)
	経口投与した後、13 日間休薬(16~28 日目)する。この 4 〕	間間を 1 サイクル
	とし、投与を繰り返す。本薬の投与量は、4 サイクルまでは~	イキサゾミブとし
	て 3 mg、5 サイクル以降はイキサゾミブとして 4 mg とする。	なお、患者の状
	態により適宜減量する	
		(下線部追加)
申請区分	1- (4) 新効能医薬品、1- (6) 新用量医薬品	. 444-944
再審查期間	残余(令和9年3月29日)	
審查等経過	• 承認申請(平成31年4月25日)	All and the second seco
承認条件	RMP	

【対象疾患】

- 初発の多発性骨髄腫(以下、「MM」)患者のうち、初回治療としての寛解導入療法により奏効が得られ、大量メルファラン療法及び自家造血幹細胞移植(以下、「ASCT」)が実施された患者(標準的治療は確立されておらず、無治療経過観察が実施されている)。
- MM の年間罹患者数は約7,800人と報告されている(国立研究開発法人国立がん研究センターがん対策情報センター、がん情報サービス2019年)。このうち、年間のASCT施行件数は約800件と報告されていることから(一般社団法人 日本造血細胞移植データセンター2018年)、MMにおけるASCT後の維持療法の対象患者数は、約800人と推測される。

【開発の経緯】

・ イキサゾミブクエン酸エステル(以下、「本薬」)は、プロテアソーム阻害剤(以下、「PI」) である。

【作用機序・特徴】

・ 本薬は、ユビキチンープロテアソーム系の 208 プロテアソームのキモトリプシン様活性部位 (β5 サブユニット) に結合し、208 プロテアソーム活性を阻害することにより、腫瘍細胞のアポトーシスを誘導し、腫瘍増殖を抑制すると考えられている。

【類薬】〔製剤名(一般名)〕

MM における ASCT 後の維持療法に係る効能・効果を有する薬剤は承認されていない。

【海外の開発状況】

• 2019 年 11 月時点において、MM における ASCT 後の維持療法に係る効能・効果にて、本薬が 承認されている国又は地域はない。

		医薬品第一部会 番譲・取告 (事制	中間行 42年前
申請者	Ţ,	売名	新規/一部変更
大塚製薬㈱	ブスルフェクス点滴静泡	E用 60 mg	一部変更
一般名	ブスルファン		
	1. 同種造血幹細胞移植	の前治療	And the second of the second o
効能・効果	2. ユーイング肉腫ファ	ミリー腫瘍、神経芽細胞腫 <u>、悪性リン</u>	<u>/パ腫</u> における自
<i>y</i> , 115	家造血幹細胞移植の	前治療	
			(下線部追加)
	〈同種造血幹細胞移植の	<u>)前治療、ユーイング肉腫ファミリー服</u>	重瘍及び神経芽細
	<u> 胞腫における自家造血軟</u>		
		f用において、成人には A 法又は B 🤄	E、小児には C 法
		斉の状態により適宜減量する。	
		5自家造血幹細胞移植の前治療〉	
	*	キ用において、成人には A 法又は B ネ	去を使用する。な
	お、患者の状態により遊	質官減量する。	
	成人	The state of the s	ارائين الماران
		ンて 1 回 0.8 mg/kg を 2 時間かけて点液	周前任する。 本剤
	は6時間毎に1日4回、		女妻 沖ーナフ ナダル
用法·用量		ンて 1 回 3.2 mg/kg を 3 時間かけて点剤 オス	育師任りる。 本利
	は1日1回、4日間投与 小児	-9 ⊘ ₀	
		して以下の体重別の投与量を 2 時間な	いけて点滴静注す
		日4回、4日間投与する。) () (Miled H) (TT)
	実体重	本剤投与量 [mg/kg]	
	9 kg 未満	1.0	
	9 kg 以上 16 kg 未満	1.2	
	16 kg 以上 23 kg 以下	1.1	
	23 kg 超 34 kg 以下	0.95	
	34 kg 超	0.8	
			(下線部追加)
申 請 区 分	1-(4)新効能医薬品、	1-(6)新用量医薬品	
再審查期間	なし		
審查等経過	• 承認申請(令和元年 11 月 12 日)		
承認条件	なし		
その他	事前評価済公知申請(名評価済)	予和元年 10 月 31 日開催医薬品第二部	会において事前

【対象疾患】

• 自家造血幹細胞移植(以下、「HSCT」)の施行対象となる悪性リンパ腫(悪性リンパ腫に対す

- る自家 HSCT の前治療として確立された大量化学療法はない)。
- 全国調査報告書(日本造血細胞移植学会 平成30年度)によると、本邦における悪性リンパ 腫患者の自家 HSCT 件数は918件であり、ブスルファン(以下、「本薬」)の投与対象となる 成人の悪性リンパ腫患者の移植件数はさらに限定される。

【開発の経緯】

- 医療上の必要性の高い未承認薬・適応外薬検討会議において、悪性リンパ腫における自家 HSCT の前治療に対する本薬の有用性は医学薬学上公知と判断され、「医療上の必要性の高い 未承認薬・適応外薬検討会議 公知申請への該当性に係る報告書:ブスルファン(悪性リンパ 腫における自家造血幹細胞移植の前治療)」(以下、「公知申請の該当性報告書」)が取り纏 められた。
- ・ 上記の報告書を基に、令和元年 10 月 31 日に開催された医薬品第二部会にて、悪性リンパ腫に おける自家 HSCT の前治療に対する本薬の有効性及び安全性に係る事前評価が行われ、公知 申請の該当性報告書に示されている効能・効果及び用法・用量で、本薬の製造販売承認事項ー 部変更承認申請(以下、「一変申請」)を行うことは可能と判断され、本一変申請に至った。

【作用機序・特徴】

 本薬は、腫瘍細胞の DNA をアルキル化し、DNA 合成を阻害すること等により、腫瘍の増殖を 抑制すると考えられている。

【類薬】〔製剤名(一般名)〕

• 悪性リンパ腫における自家 HSCT の前治療を効能・効果とする薬剤(本薬と効能・効果の-

部が異なる)

製剤名	一般名
注射用エンドキサン	シクロホスファミド水和物
アルケラン静注用	メルファラン

注)リサイオ点滴静注液(チオテパ)は、悪性リンパ腫における自家 HSCT の前治療に係る効能・効果で審査中であり、令和2年2月の医薬品第二部会において報告予定。

【海外の開発状況】

平成31年3月時点において、悪性リンパ腫における自家HSCTの前治療に係る効能・効果で、 英国、ドイツ、フランス、カナダ及びオーストラリアで承認されている。

名	称	レレバクタム水和物/イミペネム水和物/シラスタチンナトリウム
申請	者	MSD 株式会社
予定される効能・対	効果	<適応菌種>本剤に感性のカルバペネム耐性腸内細菌科細菌、カルバペネム耐性緑膿菌、カルバペネム耐性アシネトバクター属、その他のカルバペネム耐性グラム陰性菌 <適応症>各種感染症
疾病の概	要	 カルバペネム耐性菌による感染症は、免疫抑制状態、長期間の入院、長期間の抗菌薬の使用、日和見感染等の予後不良の集団に多い。 特に、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌(以下、「CRE」という。)、カルバペネム耐性 Pseudomonas aeruginosa(以下、「P. aeruginosa」という。)、カルバペネム耐性 Acinetobacter によるグラム陰性菌感染症は、カルバペネム系薬剤を含む複数の抗菌薬に耐性を示すことがあり、治療選択肢が限られている。

〇希少疾病用医薬品の指定条件

- 1. 我が国における対象患者数が5万人未満であること。もしくは、対象疾患が指定難病であること。
- 2. 医療上、特に必要性が高いこと。
- 3. 開発の可能性が高いこと。

	感染症発生動向調査における、2015 年から 2017 年までの本邦のカルバ
	ペネム耐性菌に関する感染症患者の年間報告例数は、以下のとおり。
	◆ 薬剤耐性緑膿菌感染症:それぞれ 217 例、157 例、128 例。
	♦ CRE 及び薬剤耐性 Acinetobacter 感染症: それぞれ 1,673 例、1,537
対象患者数	例、1,660 例及び 38 例、33 例、28 例
	• その他のカルバペネム耐性グラム陰性菌感染症患者数の調査結果は報
	告されていないが、投与対象は既存薬には感受性を示さない患者に限
	定されることから、本邦における患者数は限定的である。
	以上より、5万人未満の要件を満たす。
	• 本邦では、CRE、カルバペネム耐性 P. aeruginosa 又はカルバペネム耐
	性 Acinetobacter に効能又は効果を有する抗菌薬として、コリスチン
	メタンスルホン酸ナトリウム(以下、「CMS」という。)及びチゲサイク
医療上の必要性	リンが製造販売承認されている。しかしながら、CMS は腎不全等の重篤
医療上の必要性 	な腎機能障害による安全性の懸念があり、チゲサイクリンは抗菌作用
	が静菌的作用によるものであり P. aeruginosa に対する抗菌活性を示
	さない等、各薬剤における有効性及び安全性に関する課題がある。
	以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。
	• イミペネム耐性菌感染症患者を対象とした試験において、本剤の有効
 開発の可能性	性が示唆された。
開光の判形性	• また、国内試験において、一定の有効性及び安全性が確認された。
	以上より、開発の可能性は高いと考えられる。

名	称	アレムツズマブ(遺伝子組換え)
申請	者	サノフィ株式会社
予定される効能	・効果	同種造血幹細胞移植の前治療
疾病の	既 要	同種造血幹細胞移植は、標準的治療がない、又は再発性・難治性の造血器悪性腫瘍や重症再生不良性貧血に対する根治的な治療として確立されており、当該移植時においては、生着、移植片対宿主病(GVHD)の発症抑制等を目的とした前治療が実施されている。

○希少疾病用医薬品の指定条件

- 1. 我が国における対象患者数が5万人未満であること。もしくは、対象疾患が指定難病であること。
- 2. 医療上、特に必要性が高いこと。
- 3. 開発の可能性が高いこと。

・ 日本造血細胞移植データセンター及び日本造血細胞移植学会の調査によると、本邦の 2017 年における同種造血幹細胞移植件数は約 3,700 件と報告されていることから、本邦において同種造血幹細胞移植の前治療が施行される患者数は最大で年間約 3,700 人と推定される。以上より、5万人未満の要件を満たす。 ・ 造血器悪性腫瘍のヒト白血球抗原 (HLA) 不適合移植の前治療は、シクロスポリン又はタクロリムス水和物とメトトレキサート、ミコフェノール酸モフェチル又はメチルプレドニゾロンとの併用療法や、当該併用療法に抗ヒト胸腺細胞抗体 (ATG) を加えた併用療法等が用いられているものの、HLA の 2~3 抗原不適合移植は、重篤な GVHD の発症によって早期死亡が増加すること等から、新たな治療薬の開発が望まれている。・ 再生不良性貧血の同種造血幹細胞移植の前治療は、HLA 一致血縁者間移植の場合、シクロホスファミド水和物と ATG との併用療法、HLA 一致非血縁者又は HLA の 1 抗原不適合血縁者からの移植の場合、当該併用療法に全身性放射線照射を加えた治療が実施されているが、十分な治療成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれている。以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。 以上より、開発の可能性は高いと考えられる。		
対象患者数 と報告されていることから、本邦において同種造血幹細胞移植の前治療が施行される患者数は最大で年間約3,700人と推定される。以上より、5万人未満の要件を満たす。 ・ 造血器悪性腫瘍のヒト白血球抗原 (HLA) 不適合移植の前治療は、シクロスポリン又はタクロリムス水和物とメトトレキサート、ミコフェノール酸モフェチル又はメチルプレドニゾロンとの併用療法や、当該併用療法に抗ヒト胸腺細胞抗体 (ATG) を加えた併用療法等が用いられているものの、HLAの2~3 抗原不適合移植は、重篤な GVHD の発症によって早期死亡が増加すること等から、新たな治療薬の開発が望まれている。・ 再生不良性貧血の同種造血幹細胞移植の前治療は、HLA 一致血縁者間移植の場合、シクロホスファミド水和物と ATG との併用療法、HLA 一致非血縁者又は HLA の 1 抗原不適合血縁者からの移植の場合、当該併用療法に全身性放射線照射を加えた治療が実施されているが、十分な治療成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれている。以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。 ・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。		• 日本造血細胞移植データセンター及び日本造血細胞移植学会の調査に
療が施行される患者数は最大で年間約3,700人と推定される。以上より、5万人未満の要件を満たす。 ・ 造血器悪性腫瘍のヒト白血球抗原(HLA)不適合移植の前治療は、シクロスポリン又はタクロリムス水和物とメトトレキサート、ミコフェノール酸モフェチル又はメチルプレドニゾロンとの併用療法等、当該併用療法に抗ヒト胸腺細胞抗体(ATG)を加えた併用療法等が用いられているものの、HLAの2~3抗原不適合移植は、重篤な GVHD の発症によって早期死亡が増加すること等から、新たな治療薬の開発が望まれている。 ・ 再生不良性貧血の同種造血幹細胞移植の前治療は、HLA 一致血縁者間移植の場合、シクロホスファミド水和物と ATG との併用療法、HLA 一致非血縁者又は HLA の 1 抗原不適合血縁者からの移植の場合、当該併用療法に全身性放射線照射を加えた治療が実施されているが、十分な治療成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれている。以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。		よると、本邦の 2017 年における同種造血幹細胞移植件数は約 3,700 件
以上より、5万人未満の要件を満たす。 ・ 造血器悪性腫瘍のヒト白血球抗原(HLA)不適合移植の前治療は、シクロスポリン又はタクロリムス水和物とメトトレキサート、ミコフェノール酸モフェチル又はメチルプレドニゾロンとの併用療法や、当該併用療法に抗ヒト胸腺細胞抗体 (ATG) を加えた併用療法等が用いられているものの、HLA の 2~3 抗原不適合移植は、重篤な GVHD の発症によって早期死亡が増加すること等から、新たな治療薬の開発が望まれている。 ・ 再生不良性貧血の同種造血幹細胞移植の前治療は、HLA 一致血縁者間移植の場合、シクロホスファミド水和物と ATG との併用療法、HLA 一致非血縁者又は HLA の 1 抗原不適合血縁者からの移植の場合、当該併用療法に全身性放射線照射を加えた治療が実施されているが、十分な治療成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれている。以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。 ・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。	対 象 患 者 数	と報告されていることから、本邦において同種造血幹細胞移植の前治
造血器悪性腫瘍のヒト白血球抗原(HLA)不適合移植の前治療は、シクロスポリン又はタクロリムス水和物とメトトレキサート、ミコフェノール酸モフェチル又はメチルプレドニゾロンとの併用療法等、当該併用療法に抗ヒト胸腺細胞抗体(ATG)を加えた併用療法等が用いられているものの、HLAの2~3 抗原不適合移植は、重篤な GVHD の発症によって早期死亡が増加すること等から、新たな治療薬の開発が望まれている。 再生不良性貧血の同種造血幹細胞移植の前治療は、HLA 一致血縁者間移植の場合、シクロホスファミド水和物と ATG との併用療法、HLA 一致非血縁者又は HLA の 1 抗原不適合血縁者からの移植の場合、当該併用療法に全身性放射線照射を加えた治療が実施されているが、十分な治療成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれている。 以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。 ・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。		療が施行される患者数は最大で年間約3,700人と推定される。
ロスポリン又はタクロリムス水和物とメトトレキサート、ミコフェノー ル酸モフェチル又はメチルプレドニゾロンとの併用療法や、当該併用療法に抗ヒト胸腺細胞抗体 (ATG) を加えた併用療法等が用いられているものの、HLA の 2~3 抗原不適合移植は、重篤な GVHD の発症によって早期死亡が増加すること等から、新たな治療薬の開発が望まれている。 ・ 再生不良性貧血の同種造血幹細胞移植の前治療は、HLA 一致血縁者間移植の場合、シクロホスファミド水和物と ATG との併用療法、HLA 一致非血縁者又は HLA の 1 抗原不適合血縁者からの移植の場合、当該併用療法に全身性放射線照射を加えた治療が実施されているが、十分な治療成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれている。以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。 ・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。		以上より、5万人未満の要件を満たす。
ル酸モフェチル又はメチルプレドニゾロンとの併用療法や、当該併用療法に抗ヒト胸腺細胞抗体 (ATG) を加えた併用療法等が用いられているものの、HLA の 2~3 抗原不適合移植は、重篤な GVHD の発症によって早期死亡が増加すること等から、新たな治療薬の開発が望まれている。再生不良性貧血の同種造血幹細胞移植の前治療は、HLA 一致血縁者間移植の場合、シクロホスファミド水和物と ATG との併用療法、HLA 一致非血縁者又は HLA の 1 抗原不適合血縁者からの移植の場合、当該併用療法に全身性放射線照射を加えた治療が実施されているが、十分な治療成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれている。以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。 ・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。		・ 造血器悪性腫瘍のヒト白血球抗原(HLA)不適合移植の前治療は、シク
法に抗ヒト胸腺細胞抗体 (ATG) を加えた併用療法等が用いられているものの、HLAの2~3 抗原不適合移植は、重篤な GVHD の発症によって早期死亡が増加すること等から、新たな治療薬の開発が望まれている。 ・ 再生不良性貧血の同種造血幹細胞移植の前治療は、HLA 一致血縁者間移植の場合、シクロホスファミド水和物と ATG との併用療法、HLA 一致非血縁者又は HLA の 1 抗原不適合血縁者からの移植の場合、当該併用療法に全身性放射線照射を加えた治療が実施されているが、十分な治療成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれている。 以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。 ・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。		ロスポリン又はタクロリムス水和物とメトトレキサート、ミコフェノー
ものの、HLA の 2~3 抗原不適合移植は、重篤な GVHD の発症によって早期死亡が増加すること等から、新たな治療薬の開発が望まれている。 ・ 再生不良性貧血の同種造血幹細胞移植の前治療は、HLA 一致血縁者間移植の場合、シクロホスファミド水和物と ATG との併用療法、HLA 一致非血縁者又は HLA の 1 抗原不適合血縁者からの移植の場合、当該併用療法に全身性放射線照射を加えた治療が実施されているが、十分な治療成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれている。 以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。 ・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。		ル酸モフェチル又はメチルプレドニゾロンとの併用療法や、当該併用療
早期死亡が増加すること等から、新たな治療薬の開発が望まれている。 再生不良性貧血の同種造血幹細胞移植の前治療は、HLA 一致血縁者間移植の場合、シクロホスファミド水和物と ATG との併用療法、HLA 一致非血縁者又は HLA の 1 抗原不適合血縁者からの移植の場合、当該併用療法に全身性放射線照射を加えた治療が実施されているが、十分な治療成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれている。 以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。 ・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。		法に抗ヒト胸腺細胞抗体(ATG)を加えた併用療法等が用いられている
 医療上の必要性 ・ 再生不良性貧血の同種造血幹細胞移植の前治療は、HLA 一致血縁者間移植の場合、シクロホスファミド水和物と ATG との併用療法、HLA 一致非血縁者又は HLA の 1 抗原不適合血縁者からの移植の場合、当該併用療法に全身性放射線照射を加えた治療が実施されているが、十分な治療成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれている。以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。 ・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。 		ものの、HLA の 2~3 抗原不適合移植は、重篤な GVHD の発症によって
植の場合、シクロホスファミド水和物と ATG との併用療法、HLA 一致 非血縁者又は HLA の 1 抗原不適合血縁者からの移植の場合、当該併用 療法に全身性放射線照射を加えた治療が実施されているが、十分な治療 成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれてい る。 以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認 された。 ・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性 が確認された。		早期死亡が増加すること等から、新たな治療薬の開発が望まれている。
非血縁者又は HLA の 1 抗原不適合血縁者からの移植の場合、当該併用療法に全身性放射線照射を加えた治療が実施されているが、十分な治療成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれている。 以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。 ・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。	医療上の必要性	- 再生不良性貧血の同種造血幹細胞移植の前治療は、HLA 一致血縁者間移
療法に全身性放射線照射を加えた治療が実施されているが、十分な治療 成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれている。 以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。 ・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性 が確認された。		植の場合、シクロホスファミド水和物と ATG との併用療法、HLA 一致
成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれている。 以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。 ・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。		非血縁者又は HLA の 1 抗原不適合血縁者からの移植の場合、当該併用
る。 以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。 ・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。 ・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。		療法に全身性放射線照射を加えた治療が実施されているが、十分な治療
以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。		成績は得られていないこと等から、新たな治療薬の開発が望まれてい
・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。		న 。
された。 開発の可能性・後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認された。		以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。
開発の可能性 ・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性 が確認された。		・ 造血器悪性腫瘍患者を対象とした試験において、本剤の有効性が確認
が確認された。		された。
	開発の可能性	・ 後天性再生不良性貧血患者を対象とした試験において、本剤の有効性
以上より、開発の可能性は高いと考えられる。		が確認された。
		以上より、開発の可能性は高いと考えられる。

名 称	オラパリブ
申 請 者	アストラゼネカ株式会社
予定される効能・効果	BRCA遺伝子変異陽性の治癒切除不能な膵癌における維持療法
疾病の概要	BRCAの機能喪失を生じる BRCA遺伝子の変異を有する患者では、生涯で悪性腫瘍を発症するリスクが高まり、乳癌、卵管癌、原発性腹膜癌、膵癌、前立腺癌及び結腸癌のリスク増加が報告されている。膵癌は重篤で生命を脅かす疾患であり、全病期分類を合わせた5年生存率は7.7%との報告がある。

〇希少疾病用医薬品の指定条件

- 1. 我が国における対象患者数が5万人未満であること。もしくは、対象疾患が指定難病であること。
- 2. 医療上、特に必要性が高いこと。
- 3. 開発の可能性が高いこと。

3. 開発の可能性が高いこ	3. 開発の可能性が高いこと。					
対 象 患 者 数	 2017年度の厚生労働省の患者調査において「膵の悪性新生物<腫瘍>」の総患者数は約51,000人と報告されている。膵癌患者のうち、膵癌患者はで約2%~6%との報告があることを踏まえると、BRCA遺伝子変異陽性の膵癌患者は約1,020~3,060人と推計される。 なお、オラパリブについてはBRCA遺伝子変異陽性の卵巣癌及び手術不能又は再発乳癌を予定される効能・効果として希少疾病用医薬品に指定しており、BRCA遺伝子変異陽性の卵巣癌及び乳癌の患者数はそれぞれ9,280~25,520人及び1,250人と推計される。 以上より対象患者数の要件を満たす。 					
医療上の必要性	治癒切除不能な膵癌患者において、BRCA 遺伝子変異の有無にかかわらずフルオロウラシル、レボホリナート、イリノテカン塩酸塩水和物及びオキサリプラチンの併用投与等が実施されているが、多くに場合、再発又は病勢進行が認められ、依然として予後不良な疾患であり、新たな治療選択肢が求められている。 以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。					
開発の可能性	臨床試験において、オラパリブの維持投与による有効性が確認された。以上より、開発の可能性は高いと考えられる。					

名称	リツキシマブ(遺伝子組換え)
申 請 者	全薬工業株式会社
予定される効能・効果	全身性強皮症
疾病の概要	全身性強皮症(以下、「SSc」という。) は皮膚や内臓の線維化を特徴とする慢性疾患であり、皮膚硬化が四肢近位又は体幹に及ぶびまん性皮膚硬化型全身性強皮症と皮膚硬化が四肢遠位及び顔面に限局する限局皮膚硬化型全身性強皮症に分類される。SSc の病態は主に線維化、血管障害、免疫異常の3病態からなる。SSc の罹患により、寿命の短縮や内臓病変の発症や進展、皮膚硬化に続く臓器線維化等可逆性が乏しい機能不全が起こることから、早期の治療介入により病態の進行を抑制することが重要である。

〇希少疾病用医薬品の指定条件

- 1. 我が国における対象患者数が5万人未満であること。もしくは、対象疾患が指定難病であること。
- 2. 医療上、特に必要性が高いこと。
- 3. 開発の可能性が高いこと。

	• SSc は指定難病である。また、平成 29 年度における特定医療費受給者
対 象 患 者 数	証の交付件数は、27,432名である。
A constant	以上より、5万人未満の要件を満たす。
	• 本邦における SSc 治療薬として、副腎皮質ステロイド、シクロホスファ
	ミド等がある。
	• 副腎皮質ステロイド及びシクロホスファミドでは、皮膚硬化スコア(以
医病上心必再辨	下、「mRSS)」)の改善効果が報告されているが、腎クリーゼ誘発リスク、
医療上の必要性	感染症及び肺がん等の悪性腫瘍誘発のリスクにより長期投与が困難で
	あることから、SSc の皮膚硬化に対する長期投与が可能かつ有効性の高
	い治療方法が期待されている。
	以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。
	• SSc の皮膚硬化に対する治療は、2016 年日本皮膚科学会ガイドライン
	において、本剤が適応となる症例を慎重に選択しながら投与すること
開発の可能性	が提案されている。
ş	• 試験において、本剤の有効性認められた。
	以上より、開発の可能性は高いと考えられる。

名称	リツキシマブ(遺伝子組換え)
申 請 者	全薬工業株式会社
予定される効能・効果	難治性の下記疾患 尋常性天疱瘡、落葉状天疱瘡
疾病の概要	 天疱瘡は、皮膚や粘膜に病変が認められる自己免疫性水疱性疾患であり、尋常性天疱瘡、落葉状天疱瘡、その他の3型に大別される。 尋常性天疱瘡は天疱瘡の中で最も頻度が高い。最も特徴的な臨床的所見は、口腔粘膜に認められる疼痛を伴う難治性のびらん、潰瘍である。一般的に落葉状天疱瘡に比べ難治性で、予後は悪い。また、死亡リスクは年齢、性別、治療法を調整した対照群と比較して3倍高いとの報告もある。 落葉状天疱瘡の臨床的特徴は、皮膚に生じる薄い鱗屑、痂皮を伴った紅斑、弛緩性水疱、びらんである。表皮細胞間接着が失われ、角層下から顆粒層の表皮上層に裂隙形成が認められる。

○希少疾病用医薬品の指定条件

- 1. 我が国における対象患者数が5万人未満であること。もしくは、対象疾患が指定難病であること。
- 2. 医療上、特に必要性が高いこと。
- 3. 開発の可能性が高いこと。

対象患者数	天疱瘡は指定難病である。また、平成 29 年患者調査(総患者数、傷病基本分類別)によれば、本邦における天疱瘡患者の総数は約6,000 人と報告されている。 以上より、5万人未満の要件を満たす。
医療上の必要性	 国内のガイドラインで推奨される治療法は多くの症例で有効であるが、根治的治療法は未確立であり、治療導入期において病勢が制御できない症例や治療維持期においてステロイド減量が困難な症例が存在する。また、天疱瘡患者は長期にわたりステロイド内服が必要となるため、感染症、糖尿病、骨粗鬆症、精神症状などの重篤な合併症を引き起こすリスクが高い。 以上より、医療上の必要性は高いと考えられる。
開発の可能性	海外では尋常性天疱瘡に対する治療薬として本剤が承認されている。 本剤は国内外ともにガイドラインで推奨されている。国内では、臨床試験が開始されている。以上より、開発の可能性は高いと考えられる。

令和2年2月26日 医薬品第二部会 承認条件に係る報告書の審査結果

報告議題	販売名	承認取得者名	一般名	効能・効果	用法・用量	承認条件(今回対象となるもの)	承認年月日	審査結果
3義題 5	オデフシィ配合錠		リルピビリン塩 酸塩/エムト リシタビン/テ ノホビル アラ フェナミドフマ ル 酸塩	HIV-1 感染症	25 mg、テノホビル アラフェナミドとして25 mg 及びエムトリシタビンとして200 mg を含有)を	日本人を対象とした薬物動態試験を実施し、その進捗状況を定期的に報告するとともに、終了 後速やかに試験成績及び解析結果を提出する こと。	平成30年8月21日	今般提出された試験結果 に基づき評価を行った結 果、承認条件は満たされ たものと判断した。
譲題5	ヨンデリス点滴静 注用0.25mg、同点 滴静注用1mg	大鵬薬品工業株式会社	トラベクテジン	悪性軟部腫瘍	mg/m2(体務面積)を24時間かけて点滴静	国内での治験症例が極めて限られていることから、製造販売後、一定数の症例に係るデータが 集積されるまでの間は、全症例を対象に使用成 精調査を実施することにより、本剤使用患者の 背景情報を把握するとともに、本剤の安全性及 び有効性に関するデータを早期に収集し、本剤 の適正使用に必要な措置を講じること。	平成27年9月28日	今般提出された資料から、承認条件は満たされたものと判断した。

令和2年2月26日医薬品第二部会報告品目(再審査結果)

番号	版亦名	申請者名	一般名又は有効成 分名	再審査に係る効能・効果	承認年月日	再審査期間	再審查結果	備考
1	① ティーエスワン配合カプセルT20 ② ティーエスワン配合カプセルT25	大鵬薬品工業株式会社	テガフール、ギメ ラシル、オテラシ ルカリウム	(1) 胃癌 (2) 結腸・直腸癌 (3) 頭頸部癌 (4) 非小細胞肺癌	(1) 平成11 年1 月25 日 (胃 癌) (2) 平成13 年4 月4 日 (頭頸部 癌) (3) 平成15 年12 月17 日(結 腸・直腸癌) (4) 平成16 年12 月14 日(非小 細胞肺癌)	(1) 6 年 (2) (1)の残余期間(平成13 年4 月4 日~平成17 年 1月24 日) (3) (1)の残余期間(平成15 年12 月17 日~平成17 年1月24 日) (4) (1)の残余期間(平成16 年12 月14 日~平成17 年1月24 日)	カテゴリー1	_
2	セレコックス錠100 mg セレコックス錠200 mg	アステラス製薬株式会社	セレコキシブ	下記疾患並びに症状の消炎・鎮痛 関節リウマチ、変形性関節症、腰痛症、 肩関節周囲炎、頭肩腕症候群、腱・腱鞘 炎 手術後、外傷後並びに抜歯後の消炎・鎮 痛	13、平成 23 年 12 月 22 日 1 年 併後、外傷後並びに抜歯後の消炎・	年 6 月 17 日~平成 27 年 1 月 25 日) 3、1 の残余期間 (平成 23	カテゴリー!	_
3	① ヒュミラ皮下注40 mg シリンジ0.8 mL ② ヒュミラ皮下注20 mg シリンジ0.4 mL	アッヴィ合同会	・ アダリムマブ(遺 伝子組換え)	1.① 関節リウマチ (関節の構造的損傷 の防止を含む) ※4 2. 既存治療で効果不十分な下記疾患 2a.① 尋求性乾難、関節症性乾趣 2b.① 強直性脊椎炎 2c.①② 多関節に活動性を有する若年性 特殊性関節炎 2d.① 陽管型ペーチェット病 3.① 中等症又は重症の活動期にあるク ローン病の資解源入及び維持療法(既存治療で効果不十分な場合に限る) 4.① 中等症又は重症の潰瘍性大腸炎の治療(既存治療で効果不十分な場合に限る) (下線部)	平成22 年10 月27 日 ① (効能・効果26 の追加) 平成22 年10 月27 日 ① (効能・効果3 の追加) 平成23 年7 月1 日 ① (2) (利形追加、効能・効果26 の追加) 平成23 年7 月10 日 ① (効能・効果1 を関節リウマチ「関節の構造的損傷の防止を含む」に変更) 平成25 年5 月16 日 ① (効能・効果26 の追加)	20~2c, 3 1.の残余期間(各 承認日~平成28 年4 月15 日 まで) 2d 4 年	カテゴリー1	
4	① ゾレア皮下注用150 mg ② ゾレア皮下注用75 mg	ノバルティス ファーマ株式会社	オマリズマブ(遺伝子組 換え)	気管支喘息(既存治療によっても喘息症 状をコントロールできない難治の患者に 限る)	1.a ① 平成21 年1 月21 日 1.b ② 平成24 年9 月20 日 (剤形 追加)	1.a8年 1.b1.aの残余期間(平成24年9月20日~平成29年1月	カテゴリー1	

令和2年2月26日医薬品第二部会報告品目(再審査結果)

番号	販売名	申請者名	一般名又は有効成 分名	再審査に係る効能・効果	承認年月日	再審查期間	再審査結果	倫 考
5	サイモグロブリン点滴静注用25 mg	サノフィ株式会社	光投り出ラリン		1~3. 平成20年7月16日 4.① 平成23年4月22日 4.②③ 平成26年9月19日 (下線部)	1~3. 10年(平成20年7月16 日~平成30年7月15日) 4.① 1~3.0残余期間(平成 23年4月22日~平成30年7月15 日) 4.②3 4年(平成26年9月19 日~平成30年9月18日)	カテゴリー1	
6	オレンシア点滴静注用250 mg	ブリストル・マイ ヤーズ スクイブ株 式会社	アバタセプト(遺伝子 組換え)	既存治療で効果不十分な下記疾患 1. 関節リウマチ 2. 多関節に活動性を有する若年性突発 性関節炎 (下線部)	1. 平成22 年7 月23 日 2. 平成30 年2 月23 日 (効能追加) (下線部)	1. 8 年 2. 4 年 (下線部)	カテゴリー1	
7	はしか風しん混合生ワクチン「第一三共」	第一三共株式会社	乾燥弱嚢生麻しん風 しん混合ワクチン	本剤は、麻しん及び風しんの予防に使用 する。	平成 23 年1 月14 日	8 年	カテゴリー1	_

日本標準商品分類番号

87229

貯 法:2~8℃で保存

有効期間:48ヵ月

ヒト化抗IL-5モノクローナル抗体

メポリズマブ(遺伝子組換え)製剤

規制区分: 生物由来製品、

劇家

処方箋医薬品^蝕

注)注意-医師等の処方箋に

より使用すること

ヌーカラ皮下注用 100mg

Nucala for s.c. injection

承認番号	22800AMX00404	
販売開始	2016年6月	

2. 禁忌 (次の患者には投与しないこと) 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

3. 組成・性状

3.1 網成

~ , , ,,,,,,,	
販売名	ヌーカラ皮下注用 100mg
有効成分	1 バイアル中 メポリズマブ(遺伝子組換え) 144mg ただし、本剤の調製方法に基づき、日局注射用水 1.2mL に溶 解した溶液 1mL 中に含まれる損は 100mg である。 ^{詳)}
添加剂	精製白糖 230.4mg リン酸水素ニナトリウム七水和物 10.29mg ポリソルベート 80 0.9Gmg その他添加物として pH 調節剤を含有する。

本利は、チャイニーズハムスター卵巣細胞を用いて製造される。 メポリズマブ (遺伝子組換え)のセルバンクの培養に使用する培地 成分の製造において、ブタ由来成分 (カルボキシペプチダーゼ B) 及びウシの膵臓由来成分 (トリプシン)を使用している。 注)注射液吸引時の損失を考慮し、1 バイアルから 100mg を注射するに足る量を確保するために過量充てんされている。

3.2 製剤の性状

販売名	ヌーカラ皮下注用 100mg
	白色の均一な塊の凍結乾燥注射剤で、溶解後は、無色~ 微黄色又は微褐色の強明又は乳白光を呈する液
рĦ	6.5~7.5(溶解後)
浸透圧	575~900mOsm/kg(溶解後)

4. 効能又は効果

○気管支端恩(既存治療によっても喘息症状をコントロールできな い難治の患者に限る)

〇既存治療で効果不十分な好酸球性多発血管炎性肉芽腫症

5. 効能又は効果に関連する注意

〈気管支喘息〉

5.1 高用量の吸入ステロイド薬とその他の長期管理薬を併用しても、 全身性ステロイド薬の投与等が必要な喘息増悪をきたす患者に本 剤を追加して投与すること。

5.2 投与前の血中好酸球数が多いほど本剤の気管支喘息増悪発現に 対する抑制効果が大きい傾向が認められている。また、データは限 られているが、投与前の血中好酸球数が少ない患者では、十分な気 管支喘息増悪抑制効果が得られない可能性がある。本剤の作用機序 及び臨床試験で認められた投与前の血中好酸球数と有効性の関係 を十分に理解し、患者の血中好酸球数を考慮した上で、適応患者の 選択を行うこと。[17.1.1、1.1.1.2 参照]

5.3 本剤は既に起きている気管支喘息の発作や症状を速やかに軽減 する薬剤ではないので、急性の発作に対しては使用しないこと。

〈好酸球性多発血管炎性肉芽腫症〉

5.4 過去の治療において、全身性ステロイド薬による適切な治療を

行っても、効果不十分な場合に、本剤を上乗せして投与を開始する こと。

6. 用法及び用量

〈気管支端息〉

通常、成人及び12歳以上の小児にはメポリズマブ(遺伝子組換え) として1回100mgを4週間ごとに皮下に注射する。

通常、6歳以上12歳未満の小児にはメポリズマブ (遺伝子組換え) として1回40mgを4週間ごとに皮下に注射する。

〈好酸球性多発血管炎性肉芽腫症〉

通常、成人にはメポリズマブ(遺伝子組換え)として1回300mgを 4週間ごとに皮下に注射する。

7. 用法及び用量に関連する注意

〈好酸球性多発血管炎性肉芽腫症〉

本剤とシクロホスファミドを併用投与した場合の安全性は確認されていない。[17.1.3参照]

8. 重要な基本的注意

〈効能共通〉

8.1 本剤の投与は、適応疾患の治療に精通している医師のもとで行

7.1.1.5 の機能 8.2 本剤はヒトインターロイキン-5 (IL-5) と結合し、IL-5 の機能 を阻害することにより血中好酸球数を減少させる。好酸球は一部の 寄生虫 (蠕虫) 感染に対する免疫応答に関与している可能性がある。 患者が本剤投与中に蠕虫類に感染し、抗蠕虫薬による治療が無効な 場合には、本剤投与の一時中止を考慮すること。[9.1.1参照]

8.3 長期ステロイド療法を受けている患者において、本剤投与開始 後にステロイド薬を急に中止しないこと。ステロイド薬の減量が必 要な場合には、医節の管理下で徐々に行うこと。

8.4 本剤の投与期間中に喘息に関連した事象及び喘息の悪化が現れることがある。本剤の投与開始後に喘息症状がコントロール不良であったり、悪化した場合には、医師の診察を受けるよう患者に指導すること。

・9. 特定の背景を有する患者に関する注意

9.1 合併症・既往歴等のある患者

9.1.1 螺虫類に感染している患者

本剤投与開始前に蠕虫感染を治療すること。[8.2 参照]

9.5 狂婦

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には、治療上の有益性が危 険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。サルではメポ リズマブが胎盤を通過することが報告されている。

9.6 授乳鍋

治療上の有益性及び母乳栄養の有益性を考慮し、授乳の継続又は中 止を検討すること。サルではメポリズマブが乳汁中へわずかに移行 することが報告されている。

9.7 小児等

〈気管支喘息〉

9.7.1 6歳未満の小児等を対象とした臨床試験は実施していない。

〈好酸球性多発血管炎性肉芽腫症〉

9.7.2 小児等を対象とした臨床試験は実施していない。

9.8 高輪者

一般に、生理機能が低下している。

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常 が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

11.1 重大な副作用

アナフィラキシー(頻度不明)

	5%以上	1%以上 5%未満	1%未満
過敏症		過敏症反応 (蕁麻 疹、血管浮腫、発 疹、気管支痙攣、 低血圧)	
感染症			下気道感染症、 咽頭炎、尿路感 染
精神神経系	頭痛		
呼吸器			鼻閉
胃腸障害		上腹部痛	
皮膚			湿疹
筋骨格系	<u> </u>		背部痛
全身障害			発熱
投与部位	注射部位反応 (疼 痛、紅斑、腫脹、 そう痒、灼熱感)		

14. 適用上の注意

14.1 薬剤調製時の注意

14.1.1 本剤の溶解には日局注射用水を使用すること。

14.1.2 21 ゲージ注射針を装着した 2~3mL シリンジを用いて、1 バイアルあたり注射用水を1.2mL 採取し、バイアル内の粉末に注入し、溶解する。溶解後の本剤濃度は 100mg/mL である。溶液 1mL がメボリズマブ (遺伝子組換え) の投与量 100mg に相当する。溶液 0.4mL がメポリズマブ (遺伝子組換え) の投与量 40mg に相当する。

14.1.3 注射用水は粉末の中心に向けて垂直に注ぐこと。溶解中はバイアルを室温に置き、粉末が溶解するまでに 15 秒おきに 10 秒間バイアルを円を描くように静かに回転させる。泡立ちや沈殿が生じるおそれがあるため、操作中に薬液を振らないこと。通常は、注射用水を加え 5 分以内に溶解するが、追加時間を要する場合もある。14.1.4 溶解装置を用いて本剤を溶解する場合は、450rpm、10 分以内の撹拌、あるいは 1000rpm、5 分以内の撹拌で溶解すること。

14.1.5 溶解後、ただちに使用しない場合には、30℃以下で保存し、 8 時間以内に使用すること。8 時間以内に使用しない場合は廃棄す ること。また、凍結させないこと。

14.1.6 21~27 ゲージの注射針を装着したシリンジを用いて、投与 直前に溶解した薬液を 1 つのパイアルから成人及び 12 歳以上の小 児の場合は 1mL、6 歳以上 12 歳未満の小児の場合は 0.4mL 採取す ること。泡立ちや沈殿が生じるおそれがあるため、操作中に薬液を 振らないこと。使用後の残液は使用しないこと。

14.2 薬剤投与時の注意

〈効能共选〉

14.2.1 溶解後の注射液を他の医薬品と混合しないこと。

14.2.2 使用前に目視検査を行い、粒子状物質がなく透明であることを確認する。

14.2.3 注射部位は上腕部、大腿部又は腹部とすること。

〈好酸球性多発血管炎性肉芽腫症〉

14.2.4 100mg ずつ 3 ヵ所に分けて投与し、各注射部位は 5cm 以上離 すこと。

16. 薬物動態

16.1 血中濃度

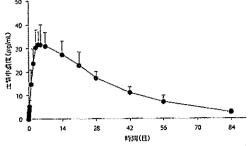
16.1.1 健康成人

(1) 皮下投与

健康成人にメポリズマブ 250mg ⁽²⁾ を単回皮下投与した時の血漿中

濃度推移を以下に示す(図-1)(外国人データ)。

図-1 健康成人にメポリズマブ 250mg を上腕部に単回皮下投与



した時の血漿中メポリズマブ濃度推移(平均値+SD、12例)

表-1 健康成人にメポリズマブ 250mg を単回皮下又は静脈内投与 した時の薬物動態パラメータ

薬物動能パラメータ	皮下投与 (上腕部) (12例)	静脈内投与 (前腕静脈) (12例)
AUC (0-inf) (μg·day/mL)	1238 (228)	1557 (250)
Cmax (μg/mL)	34.9 (7.3)	109 (17)
tmax ^{注1)} (日)	5.0 (3.0-14.0)	0.08 (0.02-0.2)
t _{1/2} (日)	20.4 (2.6)	18. 5 (2. 3)

平均値(SD)

注1) 中央値(範囲)

(2) 静脈内投与

健康成人 35 例を対象にメポリズマブ 10、75、250 及び、750mg ^{ib)} を単回静脈内投与した時の薬物動態パラメータを以下に示す(表-2)¹⁾。

表-2 健康成人にメポリズマブを単回静脈内投与した時の薬物動能パラメータ

懸ハファー	7			
薬物動態 パラメー タ	10mg (6例)	75mg (6例)	250mg (7例)	750mg (7例)
AUC (0-inf) (μg· day/mL)	54. 63 (12. 27)	493. 36 (41. 07)	1698. 66 (172. 17)	4495. 64 (413. 79)
Cmax (µg/mL)	2. 87 (0. 27)	26. 46 (1. 81)	79. 26 (11. 60)	253. 65 (28. 28)
tmax ^{注1)} (日)	0.042 (1 ³²²⁾) (0.02-0.04)	0. 104 (2. 5 th ²⁾) (0. 04- 0. 17)	0.042 (1 ^{½2)}) (0.02-0.08)	0.021 (0.5 ^{2±} ²⁾) (0.02- 0.33)
t _{1/2} (日)	27, 43 (10, 36)	19, 80 (2, 42)	36. 14 (11. 30)	22. 65 (2. 32)
Vss (L)	6. 52 (0. 77)	4.40 (0.69)	5. 65 (1. 35)	4.98 (0.54)
CL (mL/hr)	7.87 (1.68)	6. 37 (0. 55)	6. 19 (0. 63)	7.01 (0.74)

平均値(SD)

注 1) 中央値(範囲)

注 2) 単位:時間

16.1.2 重症喘息患者

(1) 成人及び 12 歳以上の小児

重症喘息患者にメポリズマブ 100mg を 4週間ごとに皮下投与した時の定常状態における薬物動態パラメータの母集団薬物動態解析に 基づく推定値を表-3 に示す。

表-3 重症喘息患者にメポリズマブ 100mg を皮下投与した時の定 常状態における薬物動態パラメータ(母集団薬物動態解析に基づく

Feb 17 2020 10:34:29

推定值)

薬物動態パラメータ	日本人(16例)	外国人(175例)
Cmax ss (ng/mL)	20048. 5 (5513. 72)	17162.3 (5014.53)
AUC ss (μg·day/maL)	405. 9 (145. 78)	359.1 (121.66)

平均值(SD)

(2) 6歳以上 12歳未満の小児

6~11 歳の小児重症喘息患者にメポリズマブ 40mg 又は 100mg 注 を 4 週間ごとに皮下投与した時の薬物動態パラメータの母集団薬物動 態解析に基づく推定値を表-4 に示す。

表-4 6~11歳の小児重症喘息患者にメポリズマブ40mg 又は 100mg を皮下投与した時の薬物動態パラメータ (母集団薬物動態解析に基 づく推定値)

用法·用量 ^{izn}	<u>薬物動態</u> パラメータ	<u>日本人</u>	外国人
40mg	Cmax ^{it2)} (µg/mL)	16.50 (2.39) (6例)	18.20 (2.25) (17例)
	AUC ss (μg·day/ml)	411.92 (72.94) <u>(6例)</u>	478. 03 (80. 99) (2051)
100mg	Cmax ^(1,2) (µg/mL)	30.50 (1例)	<u>27.06(4.08)</u> <u>(9例)</u>
	AUC ss (µg·day/mL)	748.87(1例)	675. 78 (140. 53) (9例)

平均值(SD)

注1) 体重が 40kg 未満の患者に対してはメポリズマブ 40kg 以上の患者に対してはメポリズマブ 100kg を 4 週間ごとに投与した。なお、本剤の承認用量は 6 歳以上 12 歳未満の小児気管支喘息では 40kg である。

<u>では 40mg である。</u> 注 2) メポリズマブ 40mg 又は 100mg を 4 週間ごとに 3 回皮下投与 した後の Cmax

16.1.3 好酸球性多発血管炎性肉芽腫症患者

好酸球性多陥血管炎性肉芽腫症患者にメポリズマブ 300mg を 4 週間ごとに皮下投与した時の定常状態における血漿中メポリズマブ 濃度を表-5に示す。

表-5 好酸球性多発血管炎性肉芽腫症患者にメポリズマブ 300mg を皮下投与した時の定常状態における血漿中メポリズマブ濃度

(μg/mL)		
-	投与 28 週目 (トラフ値)	投与 29 週目
全体集団	32.2 (9.98) (66 例)	45.5 (8.81) (45 🕅)
日本人集団	31.1 (6.75) 26.4, 28.2, 38.9 (3 例)	52.0 (6.25) 48.0, 48.7, 59.2 (3例)

上段: 平均値 (SD) 、中段: 各症例の血漿中メポリズマブ褒度 (日本人集団のみ)、下段: (例数)

16.2 吸収

健康成人にメポリズマブ 250mg ^{色)} を上腕部に単回皮下投与した時 の絶対的バイオアベイラビリティは75%(90%復頼区間:65.6, 86.4) であった。上腕部、大腿部又は腹部に単回皮下投与した時、投与部 位間の絶対的バイオアベイラビリティの差は小さかった(外国人デ ータ)。

16.4代謝

メポリズマブはヒト化 IgG1 モノクローナル抗体であり、体内に広く分布する蛋白質分解酵素で分解されると推定される。

注)本剤の承認用量は気管支喘息では<u>成人及び 12 歳以上の小児で</u> 100mg、<u>6 歳以上 12 歳未満の小児で 40mg、</u>好酸球性多発血管炎性肉芽腫症では 300mg である。

17. 臨床成績

17.1 有効性及び安全性に関する試験

〈気管支喘息〉

17.1.1 国際共同第四相試験 (成人及び12歳以上の小児)

12 歳以上の重症喘息患者(高用量の吸入ステロイド薬及びその他の長期管理薬を併用しているが喘息増悪をきたす患者で、血中好酸球数が試験開始時に 150/μL 以上の患者、又は過去 12 ヵ月間に300/μL 以上が認められた患者) 576 例(日本人患者 50 例を含む)を対象に実施したプラセボ対照二重盲接比較試験において、既存治療に上乗せして本剤 100mg を 4 週間ごとに皮下投与した時の 32 週間の投与期間における喘息増悪(全身性ステロイド薬による治療、入院、又は救急外来受診を必要とする喘息症状の悪化)の頻度を評価した。その結果、喘息増悪の頻度は本剤 100mg 群において 0.83 回/年、プラセボ群において 1.74 回/年であり、本剤 100mg 群はプラセボ群に比し有意に増悪頻度が少なかった(表-1)。また、組入れ時及び投与開始時における血中好酸球数別の部分集団解析結果は表-2 及び表-3 の通りであった。[5.2 参照]

本試験の治験薬投与期間における副作用発現頻度は、本剤 100mg 群で 20%(39/194 例) であった。主な副作用は、注射部位反応 7%(14/194 例)、頭痛 4%(8/194 例)及び疲労 2%(4/194 例)であった。

表-1 喘息増悪の頻度

	本剤100mg群	プラセボ群
症例数	194	191
喘息增悪発現例数 (割合)、 件数	64 (0.33), 116	105 (0.55)、 216
喘息増脹の頻度(回/年) EII)	0. 83	1. 74
プラセボ群に対する比 ^注 2) [95%信順区間 ^{注1)}]、p値 ^注 1)	0. 47 [0. 35, 0. 64], p<0. 001	

注 1) 投与期間の対数をオフセット変数、投与群、地理的地域、ベースライン時の FEV₁の予測値に対する割合、経ロステロイド 薬の併用の有無及び治験開始前 1 年間における喘息増悪の頻 度を共変量とし、負の 2 項確率分布を仮定した一般化線形モデル

注 2) 本剤 100mg 群/プラセボ群

表-2 組入れ時(投与開始 1~6 週間前)における血中好酸球数別の喘息頻繁の頻度

		本剤100mg群 (194例)	プラセボ群 (191例)
	症例数	35	21
150/μL未	喘息増悪の頻度 (回/年) ^{注1)}	1. 20	1, 31
满	プラセボ群に対する比 ^{注2)} [95%信頼区間 ^{注1)}]	0. 91 [0. 44, 1. 90]	
	症例数	49	59
150/µL以 上、	喘息増悪の頻度(回/年) ^{ま11}	0. 62	1. 28
300/μL未 満	プラセボ群に対する比 ^{注2)} [95%信頼区間 ^{注1)}]	0. 48 [0. 27, 0. 86]	
	症例数	45	48

300/µL以	喘息増悪の頻度 (回/年) 注1)	0. 78	1. 63
上、 500/μL未 満	プラセボ群に対する比 ^{注2)} [95%信頼区間 ^{注1)}]	0. 48 [0. 26, 0. 89]	
500/µL以 上	症例数	61	60
	喘息増悪の頻度 (回/年) 注1)	0. 47	2. 26
	プラセボ群に対する比 ^{注2)} [95%信頼区間 ^{注1)}]	0. 21 [0. 12, 0. 36]	

注 1) 投与期間の対数をオフセット変数、投与群、地理的地域、ベースライン時の FEV₁の予測値に対する割合、経ロステロイド 薬の併用の有無及び治験開始前 1 年間における喘息増悪の頻 度を共変量とし、負の 2 項確率分布を仮定した一般化線形モデル

注 2) 本剤 100mg 群/プラセボ群

表-3 投与開始時における血中好酸球数別の喘息増悪の頻度

表一3 投与開始時にわける皿中好版体製別の情思増悉の頻度			
		本剤100mg群 (194例)	プラセボ群 (191例)
	症例数	39	32
150/μL未	喘息増悪の頻度(回/年) 注1)	1. 15	1. 92
満	プラセボ群に対する比 ^{t22)} [95%信頼区間 ^{注1)}]	0. 60 [0. 32, 1. 13]	
	症例数	53	51
150/μL以 上、	喘息増悪の頻度 (回/年) 注1)	0. 67	1. 02
300/μL未 満	プラセボ群に対する比 ^{注2)} [95%信頼区間 ^{注1)}]	0. 66 [0. 34, 1. 29]	
	症例数	34	40
300/μL以 上、	喘息増悪の頻度 (回/年) ^{注1)}	0.80	1.66
500/μL未 満	プラセボ群に対する比 ^{注2)} [95%信頼区間 ^{注1)}]	0. 48 [0. 23, 1. 00]	
	症例数	66	66
500/µL以	喘息増悪の頻度(回/ 年) ^{注1)}	0. 54	2. 11
上	プラセボ群に対する比 te2) [95%信頼区間 ^{注1}]	0. 25 [0. 15, 0. 43]	

注 1) 投与期間の対数をオフセット変数、投与群、地理的地域、ベースライン時のFEV₁の予測値に対する割合、経ロステロイド 薬の併用の有無及び治験開始前 1 年間における喘息増悪の頻 度を共変量とし、負の 2 項確率分布を仮定した一般化線形モデル

注 2) 本剤 100mg 群/プラセボ群

17.1.2 国際共同第Ⅱ相試験 (6歳以上12歳未満の小児)

6~11 歳の小児重症喘息患者(高用量の吸入ステロイド薬及びその他の長期管理薬を併用しているが喘息増悪をきたす患者で、血中好酸球数が試験開始時に 150/μL以上の患者、又は過去 12 ヵ月間に300/μL以上が認められた患者)36 例(日本人患者 7 例を含む)を対象に実施した非対照非盲検試験において、既存治療に上乗せして本剤^{注1)、注2}を4週間ごとに 12 週間皮下投与した。8 週間の休薬後、

30 例 (日本人患者 7 例を含む) を対象に本剤^{注り、注3)} を 52 週間皮 下投与した。52 週間の投与期間における喘息増悪(全身性ステロイ 上薬による治療、入院、又は救急外来受診を必要とする喘息症状の 悪化)の頻度 (回/年 [95%信頼区間]) は、試験開始前 12 ヵ月間の 発現回数 (平均値) ^{注4} 3.5 回/年に対して 1.09 回/年 [0.63, 1.89] であった。[5.2 参照]

52 週間の投与期間における副作用発現頻度は、本剤群全体で 27% (8/30 例) であった。主な副作用は、頭痛 13% (4/30 例)、上腹部 痛 10% (3/30 例) 及び発熱 7% (2/30 例) であった。^{注 1)}

注 1) 本剤の承認用量は 6歳以上 12歳未満の小児では 40mg であ

注 2) 初回投与時に体重が 40kg 未満の患者 (26 例) に対しては本 剤 40mg を、40kg 以上の患者 (10 例) に対しては本剤 100mg を投 与した。

注3) 8週間の休薬後に体重が 40kg 未満の患者(16例)に対して は本剤 40mg を、40kg 以上の患者(10例)に対しては本剤 100mg を投与した。ただし、来院ごとに体重を測定し、体重が 40kg を超 えた患者(4例)には、以降の投与量を 100mg とした。

注 4) 全身性ステロイド薬による治療を必要とする喘息増悪の回数 と定義した。

〈好酸球性多発血管炎性肉芽腫症〉

17.1.3 国際共同第亚相試験

18 歳以上の再燃又は難治性の好酸球性多発血管炎性肉芽腫症患者 136 名(日本人患者 6 例を含む)を対象に実施したプラセボ対照二重盲検比較試験において、経口ステロイド薬(プレドニゾロン換算で 7.5~50mg/日)性10 に追加性かして本剤 300mg を 4 週間ごとに 52 週間皮下投与した 3。その結果、プラセボ群に比べ本剤 300mg 群で累積寛解維特期間が有意に長く(表-4)、また投与 36 週時及び 48 週時の両時点において寛保状態にあった症例の割合は有意に高かった(表-5)。投与期間最後の 4 週間における経口ステロイド薬の平均 1 日用量は、本剤 300mg 群でプラセボ幹よりも有意に低く、0mg となった症例は本剤 300mg 群でプラセボ幹る例)、プラセボ群 3%(2/68 例)であった。[7.参照]

本試験の治験薬投与期間及び後観察期間(8 週間)における副作用 発現頻度は、本剤 300mg 群で 51% (35/68 例) であった。主な副作用 は、注射部位反応 10% (7/68 例)、頭痛 7% (5/68 例)、無力症及び気 道感染各 6% (各 4/68 例) であった。

注 1) 経ロステロイド薬は、医師の判断で投与開始 4 週以降に適宜 減量することと設定した。

注 2) 免疫抑制剤 (シクロホスファミドを除く) は、併用可能とされた。

表-4 累積寬解維持期間

	本剤300mg群	プラセボ群
	(68 例)	(68 例)
累積寛解維持期間 注11別の症	例数(割合)	
0 遷	32 (47%)	55 (81%)
0 遷超~12 週未満	8 (12%)	8 (12%)
12 週~24 週未満	9 (13%)	3 (4%)
24 週~36 週未満	10 (15%)	0
36 週以上	9 (13%)	2 (3%)
プラセボ群に対するオッズ	5. 91	
比 ^{注2)}	[2. 68, 13. 03]	
[95%信頼区間] 注3)	p<0.001	
p 値 ^{注 3)}		

注1) 52 選問の投与期間のうちバーミンガム血管炎活動性スコア (BVAS) が 0、かつ経口ステロイド薬の平均1日用量が 4mg 以下の寛解状態にあった週数の累積期間

注 2) 本剤 300歳 群/プラセボ群

注3) ベースライン時の経口ステロイド薬の平均1日用量、BVAS、 治療群及び地域を共変量とした順序カテゴリカルデータに対 する比例オッズ回帰モデル

表-5 投与36週時及び48週時の両時点で寛解状態であった症例の割合

٠.	本剤300mg群 (68 例)	プラセボ群 (68 例)
寛解状態であった症例数	22	2
(割合) 注1)	(32%)	(3%)

プラセボ群に対するオッズ 16.74 比^{注2)} [3.61, 77.56] [95%信頼区間] ^{注3)} p<0.001

- 注 1) BVAS が 0、かつ経ロステロイド薬の 1 日用量が 4mg 以下の場合を寛解と定義し、投与 36 週時及び 48 週時の両時点で寛解 状態であった症例の割合
- 注 2) 本剤 300mg 群/プラセボ群
- 注 3) ベースライン時の経口ステロイド薬の平均1日用量、BVAS、 治療群及び地域を共変量としたロジスティック回帰モデル

18. 薬効薬理

18.1 作用機序

メポリズマブはヒトインターロイキン-5 (IL-5) に対して特異的に 結合し、好酸球の細胞表面に発現している IL-5 受容体α鎖への IL-5 結合を阻害することにより、IL-5 の好酸球増殖作用を抑制する。 18.2 好酸球に対する作用

メポリズマブの投与により、カニクイザルのアスカリス抗原誘発喘息モデルにおいて血中及び気管支肺胞洗浄液中の好酸球数が減少した。。また、本剤の投与により、重症喘息患者において血中好酸球数及び誘発喀痰中好酸球比率が減少した20.50.60。

19. 有効成分に関する理化学的知見

一般的名称:

メポリズマブ(遺伝子組換え)

Mepolizumab (Genetical Recombination)

本

メポリズマブは、遺伝子組換えヒト化モノクローナル抗体であり、マウス抗ヒトインターロイキン-5 抗体の相補性決定部、並びにヒト IgG1 のフレームワーク部及び定常部からなる。メポリズマブは、チャイニーズハムスター卵巣細胞により産生される。メポリズ(γ 1 鎖) 2 本及び 220 個のアミノ酸残基からなるL鎖(x 49) 2 本で構成される糖タンパク質(分子量:約149,000)である。

分 子 式: C₆₄₇₆H₁₀₀₈₄N₁₇₃₂O₂₀₂₃S₄₈ (糖鎖部分を含まない)

分 子 量: 約149,000

20. 取扱い上の注意

凍結を避けて保存すること。また、外箱開封後は遮光して保存する こと。

21. 承認条件

 1.1 医薬品リスク管理計画を策定の上、適切に実施すること。 (好酸球性多発血管炎性肉芽腫症)

21.2 既存治療で効果不十分な好酸球性多発血管炎性肉芽腫症について、国内での治験症例が極めて限られていることから、製造販売後、一定数の症例に係るデータが集積されるまでの間は、全症例を対象に使用成績調査を実施することにより、本剤使用患者の背景情報を把握するとともに、本剤の安全性及び有効性に関するデータを早期に収集し、本剤の適正使用に必要な措置を講じること。

22. 包装

1パイアル

23. 主要文献

- Tsukamoto N, et al.: Clin Pharmacology in Drug Development. 2016;5 (2): 102-108
- 2) Ortega H, et al.: N Engl J Med. 2014;371 (13):1198-207
- Wechsler ME, et al.: N Eng J Med. 2017;376 (20):1921-1931
- 4) Hart TK, et al. : J Allergy Clin Immunol. 2001:108:250-7
- 5) Bel E, et al.: N Engl J Med. 2014;371 (13): 1189-97
- 6) Pavord ID, et al.: Lancet. 2012;380:651-9

24. 文献請求先及び問い合わせ先

グラクソ・スミスクライン株式会社

東京都港区赤坂 1-8-1

カスタマー・ケア・センター

TEL:0120-561-007 (9:00~17:45/土日祝日及び当社休業日を除

<)

FAX: 0120-561-047 (24 時間受付)

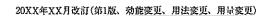
26. 製造販売業者等

26.1 製造販売元

グラクソ・スミスクライン株式会社 東京都港区赤坂 1-8-1

http://jp.gsk.com

Feb 17 2020 10:34:29



日本標準商品分類番号 874212

承認番号 23100.AMX00292 販売開始 2019年5月

造血幹細胞移植前治療薬

注射用チオテパ

^{劇薬} 処方後医薬品^{注)} **リサイオ**。 点滴静注液 100mg

RFTHIO® LV Infusion

貯法:2~8℃で保存する 有効期間:18億月

注)注意-医師等の処方能により使用すること

1. 懸告

- 1.1 本剤の投与は、緊急時に十分対応できる医療施設において、 がん化学療法及び造血幹細胞移植に十分な知識と経験をもつ 医師のもとで、本剤の投与が適切と判断される症例について のみ行うこと。また、治療開始に先立ち、患者又はその家族 に有効性及び危険性を十分に説明し、同意を得てから投与を 開始すること。
- 1.2 本剤は強い骨髄抑制作用を有する薬剤であり、本剤投与後 は重度の骨髄抑制状態となり、その結果致命的な感染症及び 出血等を引き起こすおそれがあるので、下記につき十分注意 すること。[8.1、9.1.1、11.1.1-11.1.3参照]
 - ・恩者の状態を十分に観察し、致命的な感染症の発現を抑制 するため、感染症予防のための処置(抗感染症薬の投与等) を行い、必要に応じ無菌管理を行うこと。
 - ・輸血及び血液造血因子の投与等適切な支持療法を行うこと。

2. 禁忌(次の患者には投与しないこと)

- 2.1 重症感染症を合併している患者
- 2.2 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者
- 2.3 妊婦又は妊娠している可能性のある女性[9.5参照]

3. 組成・性状

3.1 組成

販売名	リサイオ点滴静注液100mg
有划成分**	1バイアル(2.5mL)中チオテバ100mg
添加剂 [※]	1バイアル(2.5mL)中マクロゴール400適量

※本剤は注射液吸引時の損失を考慮して1バイアルからチオテパ100mg を注射するに足る量を確保するために過量充填されている。

3.2 製剤の性状

販売名	リサイオ点滴静注液100mg
性状	無色澄明の粘性の液
pH*	5.9~6.6
浸透圧比**	1.2~2.8

※本剤1バイアルを生理食塩水20~200mLに溶解した溶液の場合

4. 効能又は効果

下記疾患における自家造血幹細胞移植の前治療 悪性リンパ腫、小児悪性固形腫瘍

6. 用法及び用量

<悪性リンパ腫における自家造血幹細胞移植の前治療>

ブスルファンとの併用において、通常、成人にはチオテパとして 1日1回5mg/kgを2時間かけて点滴静注し、これを2日間連続で行 う。なお、患者の状態により適宜減量する。

<小児悪性固形腫瘍における自家造血幹細胞移植の前治療>

メルファランとの併用において、通常、チオテパとして1日1回 200mg/m²を24時間かけて点滴静注する。これを2日間連続で行

い、5日間休楽した後、さらに同用量を2日間連続で行う。なお、 患者の状態により適宜減量する。

8. 重要な基本的注意

- 8.1 本剤の使用にあたっては、患者の状態及び臓器機能(心、肺、 肝、腎機能等)を十分検討し、造血幹細胞移植を実施可能と判断 される患者にのみ投与し、以下の事項について特に注意すること。 [1.2、9.1.1、11.1.1-11.1.3参照]
 - ・心電図、血圧及び尿量等のモニターを行うこと。また、定期的 に臨床検査(血液検査、肝機能検査、腎機能検査等)を行うこと。
 - ・患者の状態を十分に観察し、致命的な感染症の発現を抑制する ため、感染症子防のための処置 (抗感染症薬の投与等)を行い、 必要に応じ無菌管理を行うこと。
 - ・輸血及び血液造血因子の投与等適切な支持療法を行うこと。
- 8.2 骨髄抑制、出血、血栓性微小血管症があらわれることがあるの で、本剂投与開始前及び投与中は定期的に血液検査を行い、患者 の状態を十分に観察すること。[11.4.2、11.1.3、11.1.8参照]
- 8.3 腎機能障害があらわれることがあるので、本剤投与開始前及び 投与中は定則的に腎機能検査を行い、患者の状態を十分に観察す ること。[9.2、11.1.5参照]
- 8.4 肝中心静脈閉塞症 (VOD) /類洞閉塞症候群 (SOS) があらわれる ことがあるので、本剤投与開始前及び投与中は定期的に肝機能検 査を行い、患者の状態を十分に観察すること。[11.1.9参照]
- 8.5 皮膚剥離等の皮膚障害があらわれることがあるので、特に小児 への本剤投与中は皮膚の保清・保湿又は皮膚刺激の低減等を行う こと。[11.1.7参照]

9. 特定の背景を有する患者に関する注意

- 9.1 合併症・既往歴等のある患者
- 9.1.1 感染症を合併している患者

感染症が増悪し致命的となることがある。[1.2、8.1、11.1.1参照]

9.2 腎機能障害患者

腎機能障害が増悪するおそれがある。[8.3、11.1.5参照]

9.3 肝機能障害患者

肝機能障害が増悪するおそれがある。

9.4 生殖能を有する者

- 9.4.1 性腺に対する影響を考慮すること()~4)。[15.2.2参照]
- 9.4.2 妊娠する可能性のある女性には、本剤投与中及び投与終了後 一定期間は適切な避妊をするよう指導すること。[9.5参照]
- 9.4.3 パートナーが妊娠する可能性のある男性には、本剤投与中 及び投与終了後一定期間は適切な避妊をするよう指導すること。 [15.2.3参照]

9.5 妊孏

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には投与しないこと。動 物実験で催奇形性(マウス:巨指・欠趾、小顎症、口蓋裂等、ラッ ト:腎形成不全、無尾、減指等)、胎児死亡(マウス、ウサギ)が認 められたとの報告がある。[2.3、9.4.2参照]

9.6 授乳婦

授乳しないことが望ましい。本剤のヒト乳汁中への移行について は不明である。[15.2.3参照]

9.7 小児等

- 9.7.1 低出生体重児又は新生児を対象とした臨床試験は実施していたい。
- 9.7.2 成長障害等が起こる可能性を十分に考慮すること。 <u>チオテバ</u> を前治療薬とした造血幹細胞移植を施行した小児において、成長 酸害等を発現したとの報告がある⁵。

10. 相互作用

本剤はCYP2B6の阻害作用を持つ。

10.2 併用注意(併用に注意すること)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
シクロホスファ	シクロホスファミドの活	本剤のCYP2B6阻害
	性代謝物の血中濃度が低	
[16.7.1参照]	下し、シクロホスファミ	ホスファミドの代謝
	ドの有効性が減弱するお	
	それがある。	可能性がある。

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

11.1 重大な副作用

11.1.1 感染症(21.1%)

細菌感染 (15.8%)、真菌感染 (10.5%)、肺炎 (5.3%)、敗血症 (頻度不明)等の感染症があらわれることがある。[1.2.8.1、9.1.1参照]

11.1.2 骨髓抑制(78.9%)

発熱性好中球減少症 (78.9%)、白血球減少 (頻度不明)、血小板減少 (頻度不明)、貧血 (頻度不明)等の骨髄抑制があらわれることがある。[1.2、8.1、8.2参照]

11.1.3 出血(10.5%)

胃腸出血(頻度不明)、肺出血(頻度不明)等の出血があらわれることがある。[1.2、8.1、8.2参照]

11.1.4 肺水腫、浮腫、体液貯留(21.1%)

肺水腫(10.5%)、浮腫(21.1%)、胸水(10.5%)、心嚢液貯留(10.5%) があらわれることがあり、胸水及び心嚢液貯留により心停止に 至ったと考えられる症例が報告されているので、患者の状態を十 分に観察し、異常が認められた場合には、利尿剤の投与、本剤の 減量又は投与中止等の適切な処置を行うこと。

11.1.5 腎機能障害(10.5%)

☆性腎障害(10.5%)等の腎障害があらわれることがある。[8.3、9.2参照]

11.1.6 胃腸障害(100.0%)

口内炎等の粘膜障害 (94.7%)、悪心 (84.2%)、嘔吐 (68.4%)、下 痢(84.2%)、食欲不振(73.7%)等があらわれることがある。

11.1.7 皮膚障害(63.2%)

皮膚色素過剰 (21.1%)、皮膚炎 $(\underline{10.5}\%)$ 、皮膚乾燥 $(\underline{10.5}\%)$ 、皮膚
材剥脱 $(\underline{5.3}\%)$ 、皮膚疼痛 $(\underline{5.3}\%)$ 、そう痒 $(\underline{5.3}\%)$ 等の皮膚障害が
あらわれることがある。[8.5参照]

11.1.8 血栓性微小血管症(頻度不明)

[8.2参照]

11.1.9 肝中心静脈閉塞症(VOD)/類洞閉塞症候群(SOS)(頻度不明) [8.4参照]

11.2 その他の副作用

	20%以上	20%未満	頻度不明
血液		100 M	低ガンマグロブリ
			ン血症

肝臓 /	20%以上		頻度不明
(11 1 22.1	AIDLE MINES	RI FA SE
	200 000	ALP上昇、血中乳酸	肝學 官
		脱水素酵素増加	
	AST上昇		
	(52.6%)		:
	-GTP 上		
	早(<u>36.8</u> %)		
腎臟		尿中ブドウ糖陽性、	
		血尿、蛋白尿	nets t de Lei dell'oriz esta
呼吸器		呼吸不全、肺高血圧	略皿、急性呼吸網
		症、鼻閉、咽喉頭痛	
			難、低發素症
循環器		血圧上昇、心停止、	房室プロック、心
		大動脈弁閉鎖不全	室性期外収縮、心
		症、洞性頻脈、毛細	不全
		血管漏出症候群	
消化器		肛門の炎症、肛門周	肛門狭窄、イレウ
		囲痛、腸炎、腹痛、	ス、消化管浮腫
		胃炎、口腔内痛、口	
		内乾燥	
精神神経系	味覚異常	不安、頭痛、感覚鈍麻、	痙攣、熱性痙攣、
	(42.1%)	傾眠、譫妄、不眠	異常行動、意識変
1 1			容状態、脳症
皮膚	既状丘疹	紫斑、手掌·足底発	発疹
;	伏皮疹、脱	赤知覚不全症候群	
	毛症		
腿		眼そう痒症	
その他	カ中アル	発熱、血中カルシウ	口渇、術創の治癒
, , ,	プミン低下	ム低下、血中カリウ	遷延、注射部位疼
]	(31 6%)	ム低下、陰茎痛、悪寒、	痛、骨肉腫、甲状
	藤 危感	血中アミラーゼ増加、	腺癌、聴覚障害、
and the state of t		血中カリウム上昇、	ショック、無力症、
-		血中ナトリウム上昇、	全身健康状態低下
Annua		血中ナトリウム低下、	
		血中マグネシウム低	The state of the s
		下、非心臟性胸痛、	
		血中リン低下	

14. 適用 Lの注意

14.1 薬剤調製時の注意

- 14.1.1 本剤は保存中に凝固することがあるため、常温下で融解したことを確認してから使用すること。
- 14.1.2 本剤は発がん性を有するおそれがあること、並びに揮発性 を有することから、調製時には手袋、マスク、防護メガネ等を着 用し、安全キャビネット内等で調製を行うこと。本剤の溶液が皮 屑に付着した場合には石鹸及び多量の水で、粘膜、眼に付着した 場合には多量の流水で、直ちによく洗うこと。
- 14.1.3 患者<u>体重又は</u>体表面積あたりで計算した1日投与量を1バイア ルあたり20~200mLの生理食塩液又は5%ブドウ糖注射液に添加し、 十分に混和して使用すること。なお、希釈後の薬液は0.5~4.4mg/ mLの濃度において室温で26時間までの安定性が確認されている。
- 14.1.4 希釈調製から26時間以内に投与を終了すること。

14.2 薬剤投与時の注意

- 14.2.1 他剤と配合又は混注しないこと。
- 14.2.2 孔径0.2µmのインラインフィルターを用いて投与すること。

15. その他の注意

15.1 臨床使用に基づく情報

- 15.1.1 自家造血幹細胞移植の前治療としてチオテバを含むアルキル化剤を投与して二次性悪性腫瘍を発現したとの報告がある⁶⁾。また、膀胱癌摘出後(承認外効能・効果)に長期投与した患者で急性骨髄性白血病が発症したとの報告がある⁷⁾。
- 15.1.2 自家造血幹細胞移植の前治療として本剤とブスルファンを投与した思者において、間質性肺疾思が認められたとの報告がある。

15.2 非臨床試験に基づく情報

15.2.1 マウスに腹腔内投与したがん原性試験で肺腫瘍、造血器系腫瘍及び扁平上皮癌が、ラットに腹腔内投与したがん原性試験で造血器系腫瘍、扁平上皮癌及び腺癌が、ラットに静脈内投与したがん原性試験で多臓器に腫瘍が発生したとの報告がある80-100。

- 15.2.2 雄動物(マウス、ラット)に投与した実験で、精子形成異常 及び妊娠率の低下が報告されている1)-4)。[9.4.1参照]
- 15.2.3 遺伝子突然変異試験、染色体異常試験、小核試験等で遺伝 毒性が認められたとの報告がある。[9.4.3、9.6参照]

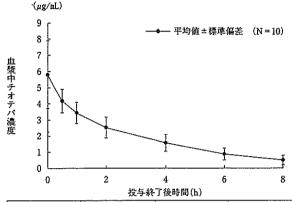
16. 薬物動態

16.1 血中濃度

16.1.1 単回投与

(1)悪性リンバ腫における自家造血幹細胞移植の前治療

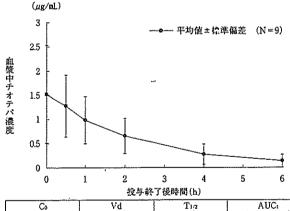
成人 (16歳以上) 悪性リンパ腫患者10例に本剤200mg/m²/日を2時間か けて静脈内に点滴投与(初回)したとき^{注)}の血漿中チオテパ濃度推移 (平均値±標準偏差)を図に薬物動態パラメータを表に示した¹¹⁾。



Co Vd AUC T1/2 (L/m^2) (h) (µg·h/mL) (µg/mL) 21.2 ± 5.2 5.8 ± 2.1 26.4 ± 5.5 2.1 ± 0.4

(2) 小児悪性固形腫瘍における自家造血幹細胞移植の前治療

小児悪性固形腫瘍患者9例に本剤200mg/m2/日を24時間かけて静脈内 に点滴投与(初回)したときの血漿中チオテパ濃度推移(平均値±標準 偏差)を図に薬物動態パラメータを表に示した110。



AUC: (μg · h/mL) $(\mu g/mL)$ (L/m^2) (h) 16.4 ± 8.5 1.6 ± 0.5 21.6 ± 14.1 1.5 ± 1.0

16.3 分布

健康成人及びがん患者におけるチオテバの血清中タンパク結合率は、 それぞれ8及び13%であるとの報告がある(2)(in vitro)。

16.4 代謝

チオテパの代謝経路はCYP3A4及びCYP2B6による酸化であり、別の代謝 経路としてグルタチオン抱合も関与するとの報告がある13、10(in vitro)。

16.5 排泄

がん患者1例に放射性標識したチオテパ0.3mg/kgを2時間かけて静脈 内投与したとき(4)、投与24時間後までの投与放射能の尿中排泄率は 63%であったとの報告がある15)(外国人データ)。また、がん患者6例に チオテパ20mgを静脈内投与したとき⁽¹⁾、投与48時間後までの未変化 体の尿中排泄率は0.16%であったとの報告がある16(外国人データ)。

16.7 薬物相互作用

16.7.1 シクロホスファミド

がん患者3例にシクロホスファミド1000又は1500mg/m²/日(1時間持 続静脈内投与)、カルボプラチン265又は400mg/m2/日(1時間持続静 脈内投与) 及びチオテパ80又は120mg/m²/日 (30分持続静脈内投与) の 投与順序を変えて投与したとき^{注)}、チオテバ投与後にシクロホスファ ミドを投与した場合の4-水酸化シクロホスファミド(活性代謝物)の Cmax及びAUCは、シクロホスファミド投与後にチオテバを投与した 場合と比較して、それぞれ62、及び26%低下したとの報告がある18)(外 国人データ)。「10.2参照]

16.7.2 その他

チオテバはP-gpの基質であるとの報告があるⁱⁿ(in vitro)。

注)悪性リンパ腫及び小児悪性固形腫瘍に対して本剤の承認された用 量は、それぞれ5mg/kg/日及び $200mg/m^2/$ 日である。

17. 臨床成績

17.1 有効性及び安全性に関する試験

17.1.1 国内第 [相試験

自家造血幹細胞移植の前治療として、悪性リンパ腫患者には、ブスル ファンとの併用で本剤200mg/m²/日^{注)}を自家造血幹細胞移植施行の4° 及び3日前に2時間かけて静脈内に点滴投与した。また、小児悪性固形 腫瘍患者には、メルファランとの併用で本剤200mg/m²/日を自家造 血幹細胞移植施行の12、11、5及び4日前に24時間かけて静脈内に点滴 投与した。結果は下表のとおりであった。

	悪性リンパ顔患者	小児思性間形腫瘍患者
	(10段) 9,	(981)
骨髓抑制率(%)*	100	100
生治率(%)上[95%信赖区間]	100[69.2~100]	66.7[29.9~92.5]
生着までの日数*(中央値(範囲))	11.0(10~1.1)	11.0(10~23)
造魚幹網絡移制100日後の生存率(%) [95%移動図]	100(NE~NE)	77.8[36.5~93.9]

NE: 指定不能 a) 前膝楽投与後から造血幹細胞移植施行後28日以内に好中球数が500/µL未満と

なった患者の関合。 b)治験薬投与後から造血首編鬼移植施行後28日以内に骨髄抑制が認められ、かつ造血幹細胞移植施行後に3日連続で好中は数が500/µL以上であった患者の割

合。 の治験楽技与後から造庫幹細胞移植維行後28日以内に骨髄抑制が認められ、か の造血幹細胞移植維行後に3日池壁で好中球数が500/μL以上になった場合の第 1日を生養日と完美し、売血幹細胞移植維行1から生着日までの日数。 <u>が組み入れられた準性リンパ腫の発煙は、中枢神経系度免リンパ腫(9</u>個)及びび 主ん性大綱胞型B網胞リンパ腫1円)であった。

悪性リンパ腫患者における調作用発現頻度は100.0% (10/10例) であ り、主な副作用は、発熱性好中球減少症10例(100.0%)、悪心10例 (100.0%)、下痢8例(80.0%)、食欲不振7例(70.0%)であった。また、 小児悪性固形腫瘍患者における副作用発現頻度は100.0% (9/9例)であ り、主な副作用は、口内炎9例 (100.0%)、嘔吐9例 (100.0%)、下痢8 例(88,9%)、食欲不振7例(77.8%)であった些。

注) 悪性リンパ腫に対して本剤の承認された用量は、5mg/kg/日である。

18. 薬効薬理

18.1 作用機序

チオテパは、エチレンイミン系のアルキル化剤であり、DNA合成を阻 害すること等により、腫瘍増殖抑制作用を示すと考えられているい。

18.2 抗蹻瘤効果

18.2.1 チオテパは、小児悪性固形腫瘍である髄芽腫由来TE-671、 D283 MED及びDaoy細胞株並びにラブドイド腫瘍由来BT16細胞株に 対して増殖抑制作用を示した^{19)、20)}(in vitro)。

18.2.2 チオテバは、Daoy細胞株を皮下及び脳内にそれぞれ移植した ヌードマウスにおいて、腫瘍増殖抑制作用を示した19)。

19. 有効成分に関する理化学的知見

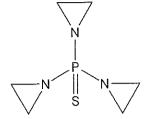
一般的名称:チオテバ(Thiotepa)

化学名: Tris(aziridin-I-yl)phosphine sulfide

分子式: C6Hi2N3PS 分子母: 189.22

性状:白色の結晶又は粉末。アセトン、ジクロロメタン、クロロホルム及び エタノールに極めて溶けやすく、水及びジエチルエーテルに溶けやすい。

化学構造式:



融点:52~57℃

20. 取扱い上の注意

本剤は発がん性を有するおそれがあること、並びに揮発性を有することから、医療関係者の驟露防止対策を行うこと。

21. 承認条件

医薬品リスク管理計画を策定の上、適切に実施すること。

22. 包装

2.5mL[1パイアル]

23. 主要文献

- 1) Meistrich ML., et al.: Cancer Res. 1982; 42: 122-131
- Evenson DP., et al.: Toxicol Appl Pharmacol. 1986; 82(1): 151-163
- 3)大鳥 寛; 日本不妊学会雑誌. 1971; 16(2): 146-148
- 4) Jackson H., et al.: Br J Pharmacol Chemother. 1959; 14(2): 149-157
- 5)中村こずえ他: 小児がん、2009; 46(3): 331-336
- 6) Waheed F., et al.: Leukemia & Lymphoma. 2004; 45(11): 2253-2259
- 7) Easton DJ., et al.: Can. Med. Assoc. J. 1983; 129: 578-579
- 8) IARC: IARC Monographs. 2012; 100A: 163-169
- 9) Stoner GD., et al.: Cancer Res. 1973; 33: 3069-3085
- 10) National Toxicology Program: Natl Cancer Inst Carcinog Tech Rep Ser. 1978; 58: 1-168
- 11)大日本住友製薬資料: チオテバの薬物動態試験(2019年3月26日承認、CTD 2.5.3.1, 2.7.3.3, 2.7.6.1.2.2)
- 12) Hagen B., et al.: Cancer Chemother Pharmacol. 1987; 20: 319-323
- 13) Jacobson PA., et al.: Cancer Chemother Pharmacol. 2002; 49: 461-467
- 14) Maanen MJ., et al.: Cancer Treat Rev. 2000; 26: 257-268
- 15) Mellett LB., et al.: J Lab Clin Med. 1962; 60: 818-825
- 16) Hagen B., et al.: Cancer Chemother Pharmacol. 1990; 25: 257-262
- 17) Veringa SJ., et al.: PLoS One. 2013; 8(4): e61512
- 18) Huitema AD., et al.: Cancer Chemother Pharmacol. 2000; 46: 119-127
- 19) Friedman HS., et al.: Cancer Res. 1988; 48: 4189-4195
- 20) Lünenbürger H., et al.: Anti-Cancer Drugs. 2010; 21: 514-522

24. 文献請求先及び問い合わせ先

大日本住友製薬株式会社

〒541-0045 大阪市中央区道修町2-6-8

<u>くすり情報センター</u> TEL 0120-034-389

26. 製造販売業者等

26.1 製造販売元

大日本住友製薬株式会社

大阪市中央区道修町2-6-8

20XX年 X 月改訂 (第 X 版)

抗悪性腫瘍剤 (プロテアソーム阻害剤)

874291

日本標準商品分類番号

沪法: 室温保存

イキサゾミブクエン酸エステルカプセル

有効期間:3年 ニンラーロカプセル 2.3mg

ニンラーロカプセル 3mg

ニンラーロカプセル 4mg

NINLARO capsules 2.3mg, 3mg & 4mg

規制区分:霉薬、処方箋医薬品(注)

注) 注意-医師等の処方箋により使用すること

)	
	ニンラーロ	ニンラーロ	ニンラーロ
	カプセル 2.3mg	カプセル 3mg	カプセル 4mg
承認番号	22900AMX00533	22900AMX00534	22900AMX00535
販売開始	2017年5月	2017年5月	2017年5月

1. 警告

本剤は、緊急時に十分対応できる医療施設において、造血 器悪性腫瘍の治療に対して十分な知識と経験を持つ医師の もとで、本剤が適切と判断される症例についてのみ投与す ること。また、治療開始に先立ち、患者又はその家族に有 効性及び危険性を十分説明し、同意を得てから投与するこ と。

- 2. 禁忌(次の患者には投与しないこと)
- 2.1 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者
- 2.2 妊婦又は妊娠している可能性のある女性 [9.5 参照]

3. 組成·性状

3.1 組成

ニンラーロカプセル 2. 3mg	ニンラーロカブセル 3mg	ニンラーロカプセル 4mg
イキサゾミブクエン 酸 エ ス テ ル 3.29mg(イキサゾミ ブとして2.3mg)	イキサゾミブクエ ン 酸 エ ス テ ル 4.30mg (イキサゾミ プとして 3.0mg)	ン 酸 エ ス テ ル 5.73mg(イキサゾミ ブとして4.0mg)
シウム、酸化チタン	′、ラウリル硫酸ナ 	
	2.3mg 1カプセル中 イキサゾミブクエン 酸 エ ス テ ル 3.29mg (イキサゾミ ブとして 2.3mg) 詰晶セルロース、セ シウム、酸化チタン	2.3mg 3mg 1カプセル中 イキサゾミブクエ ン 酸 エ ス テ ルン 酸 エ ス テ ル 3.29mg (イキサゾミ ブとして 2.3mg) ブとして 3.0mg) 枯晶セルロース、ゼラチン、タルク、スシウム、酸化チタン、ラウリル硫酸ナ

3.2 製剤の性状

DIS A	ニンラーロカプセル	ニンラーロカプセル	ニンラーロカプセル
販売名	2. 3mg	3mg	4mg
剤形	硬カプセル剤	硬カプセル剤	硬カプセル剤
色調	微赤色	明るい灰色	淡橙色
識別コード	4 01	@ 402	4 03

形状	2.3mg	3mg	4 T 4 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
号数	4号	4 号	3号
長径 (mm)	約 14.3	約 14.3	約 15.9
短径 (mm)	5, 3	5. 3	5.8
質量 (mg)	約 108	約 108	約 163

4. 効能又は効果

- ○再発又は難治性の多発性骨髄腫
- ○多発性骨髄腫における自家造血幹細胞移植後の維持療法
- 5. 効能又は効果に関連する注意

〈再発又は難治性の多発性骨髄腫〉

- 5.1 本剤による治療は、少なくとも1つの標準的な治療が無効 又は治療後に再発した患者を対象とすること。
- 5.2 臨床試験に組み入れられた患者の前治療歴等について、 「17. 臨床成績」の項の内容を熟知し、本剤の有効性及び安 全性を十分理解した上で、適応患者の選択を行うこと。

6. 用法及び用量

〈再発又は難治性の多発性骨髄腫〉

レナリドミド及びデキサメタゾンとの併用において、通常、成人にはイキサゾミブとして 1 日 1 回 4 mg を空腹時に週 1 回、3 週間(1、8 及び 15 日 1 日)経口投与した後、13 日間休薬(16~28 日 1)する。この 1 週間を 1 サイクルとし、投与を繰り返す。なお、患者の状態により適宜減量する。

〈多発性骨髄腫における自家造血幹細胞移植後の維持療法〉

通常、成人には1日1回、本剤を空腹時に週1回、3週間(1、8及び15日目)経口投与した後、13日間休薬(16~28日目)する。この4週間を1サイクルとし、投与を繰り返す。本剤の投与量は、4サイクルまではイキサゾミブとして3mg、5サイクル以降はイキサゾミブとして4mgとする。なお、患者の状態により適宜減量する。

7. 用法及び用量に関連する注意

〈効能共通〉

- 7.1 食後に本剤を投与した場合、本剤の C_{max} 及び AUC が低下するとの報告がある。食事の影響を避けるため、食事の 1 時間前から食後 2 時間までの間の服用は避けること。 [16.2.1 参照]
- 7.2 新たなサイクルの開始にあたっては、以下の基準を参考に 投与の可否を判断すること。

サイクル開始基準

好中球数	1,000/mm³以上
血小板数	75,000/mm³以上
非血液毒	ベースライン又は Grade1 以下に回復
性	•

Grade は NCI-CTCAE v4.0 に基づく

〈再発又は難治性の多発性骨髄腫〉

- 7.3 本剤を単独投与した場合の有効性及び安全性は確立していない。
- 7.4 レナリドミド及びデキサメタゾンの投与に際しては、「17. 臨床成績」の項の内容を熟知し、投与すること。
- 7.5 レナリドミド及びデキサメタゾン以外の抗悪性腫瘍剤と の併用における有効性及び安全性は確立していない。
- 7.6 本剤投与により副作用が発現した場合には、以下の基準を 参考に、本剤を休薬、減量、中止すること。 [8.、11.1.1、 11.1.4参照]

本剤の減量ステップ

開始用量	4mg
ステップ 1(1 段階減量)	3mg
ステップ 2(2 段階減量)	2.3mg
ステップ 3	投与中止

休薬・減量・中止基準

副作用	程度	処置
血小板減少症	血 小 板 数 30,000/mm³未満	30,000/mm³以上に回復するまで、休薬する。回復後、同一用量で投与を再開できる。再び30,000/mm³未満に減少した場合は、30,000/mm³以上に回復するまで、休薬する。回復後、1段階減量して投与を再開できる。
好中球減少症	好 中 球 数 500/mm³未満	500/mm³以上に回復するまで、休薬する。回復後、同一用量で投与を再開できる。再び500/mm³以上に回復するまで、休薬する。回復後、1段階減量して投与を再開できる。
皮膚障害	Grade2	対症療法を行い、投与を継続できる。忍容できない場合は、下記「Grade3」参照。 Grade1以下に回復するまで、休薬する。回復後、1段階減量して投与を再開できる。
	Grade4	投与を中止する。
末梢神経障害	疼痛を伴う Gradel 又は疼痛を伴わない Grade2 疼痛を伴う Grade2 又は Grade3	ベースライン又は疼痛を伴わない Gradel 以下に回復するまで、休薬する。回復後、同一用量で投与を再開できる。 ベースライン又は Gradel 以下に回復するまで、休薬する。回復後、1 段階減量して
		投与を再開できる。
上記以 外の副 作用	Grade4 Grade3 の非血液 毒性 Grade4 の非血液	投与を中止する。 ベースライン又は Gradel 以 下に回復するまで、休薬す る。回復後、1 段階減量して 投与を再開できる。 投与を中止する。
	ま性 毒性	X 7 4 T T ነ % o

Grade は NCI-CTCAE v4.0 に基づく

〈多発性骨髄腫における自家造血幹細胞移植後の維持療法〉

- 7.7 他の抗悪性腫瘍剤との併用における有効性及び安全性は 確立していない。
- 7.8 本剤を24ヵ月を超えて投与した場合の有効性及び安全性は確立していない。
- 7.9 本剤投与により副作用が発現した場合には、以下の基準を 参考に、本剤を休薬、減量、中止すること。 [8.、11.1.1、 11.1.4 参照]

本剤の減量ステップ

	1~4 サイク	5 サイクル以降
	<u>ル</u>	
通常用量	3mg	4mg
ステップ 1(1 段階減	2. 3mg	3mg
<u>最)</u>		
ステップ 2(2 段階減	投与中止	2. 3mg
量)		
ステップ3		投与中止

休薬・減量・中止基準

<u> </u>			
副作用	程度	処置	
血小板減	血小板数	75,000/mm3以上に回復する	
少症	50,000/mm³未満	まで、休薬する。回復後、1	
		段階減量して投与を再開で	
		<u>きる。</u>	
好中球減	<u>好 中 球 数</u>	1,000/mm³以上に回復するま	
少症	750/mm³未満	で、休薬する。回復後、1段	
		階減量して投与を再開でき	
		<u>る。</u>	
皮膚障害	Grade2	対症療法を行い、投与を継	
		続できる。忍容できない場	
		合は、1段階減量して投与す	
		<u> వ.</u>	
-	<u>Grade3</u>	Gradel 以下に回復するま	
		で、休薬する。回復後、1段	
		階減量して投与を再開でき	
1		<u> ప.</u>	
	Grade4	投与を中止する。	
末梢神経	疼痛を伴う	ベースライン又は疼痛を伴	
障害	Gradel 又は疼痛	わない Grade1 以下に回復す	
	<u>を伴わない</u>	るまで、休薬する。回復後、	
	<u>Grade2</u>	同一用量で投与を再開でき	
		<u>る。</u>	
	疼痛を伴う	ベースライン又は Grade1 以	
	Grade2 又 は	下に回復するまで、休薬す	
	<u>Grade3</u>	る。回復後、1段階減量して	
	······	投与を再開できる。	
L	Grade4	投与を中止する。	
上記以外	Grade3 の非血液	ベースライン又は Grade1 以	
の副作用	毒性	下に回復するまで、休薬す	
		る。回復後、1段階減量して	
		投与を再開できる。	
	Grade4 の非血液	投与を中止する。又は治療	
	毒性	上の有益性を考慮し、1段階	
		減量して投与を再開でき	
		<u> </u>	

Grade は NCI-CTCAE v4.0 に基づく

8. 重要な基本的注意

血小板減少症があらわれることがあるので、本剤の投与中は 定期的に血液学的検査を行い、患者の状態を十分に観察する こと。 [7.6、7.9、11.1.1 参照]

- 9. 特定の背景を有する患者に関する注意
- 9.2 腎機能障害患者
- 9.2.1 重度の腎機能障害のある患者 (クレアチニンクリアランスが 30mL/min 未満)

減量を考慮するとともに、患者の状態をより慎重に観察し、 有害事象の発現に十分注意すること。本剤の血中濃度が上 昇することがあり、副作用が強くあらわれるおそれがある。 [16.6.1 参照]

9.3 肝機能障害患者

9.3.1 中等度以上の肝機能障害のある患者(総ビリルビン値が 基準値上限の1.5倍超)

減量を考慮するとともに、患者の状態をより慎重に観察し、 有害事象の発現に十分注意すること。本剤の血中濃度が上 昇することがあり、副作用が強くあらわれるおそれがある。 [16.6.2 参照]

9.4 生殖能を有する者

- 9.4.1 妊娠可能な女性に対しては、本剤投与中及び投与終了後 一定期間は適切な避妊を行うよう指導すること。[9.5 参照]
- 9.4.2 パートナーが妊娠する可能性のある男性に対しては、本 剤投与中及び投与終了後一定期間は適切な避妊を行うよう 指導すること。ラットにおいて AUC 比較で臨床曝露量を下ま わる用量で精巣毒性が認められた。

9.5 妊婦

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には投与しないこと。ウサギにおいて、AUC 比較で臨床曝露量の 1.8 倍に相当する用量で催奇形性(胎児の尾椎異常及び短尾)が認められた。 [2.2、9.4.1 参照]

9.6 授乳婦

治療上の有益性及び母乳栄養の有益性を考慮し、授乳の継 続又は中止を検討すること。ヒト乳汁中への移行は不明で ある。

9.7 小児等

小児等を対象とした臨床試験は実施していない。

9.8 高齢者

患者の状態を観察しながら投与すること。一般に生理機能 が低下していることが多い。

10. 相互作用

10.2 併用注意 (併用に注意すること)

薬剤名等	臨床症状·措置方法	機序・危険因子
CYP3A 誘導剤	本剤の血中濃度が	リファンピシンの
リファンピシン、カ	低下し、効果が減弱	薬物代謝酵素
ルバマゼピン、フェ	するおそれがある	(CYP3A 等) に対す
ニトイン等	ので、CYP3A 誘導作	る誘導作用によ
セイヨウオトギリソ		
ウ (St. John's Wort、	代替を考慮するこ	促進される。
セント・ジョーン	と。	
ズ・ワート) 含有食		
品等	•	
[16.7.1 参照]		

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な 処置を行うこと。

11.1 重大な副作用

11.1.1 血小板減少症(19.5%)

[7.6、7.9、8.参照]

- 11.1、2 重度の下痢(3.3%)
- 11.1.3 皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson 症候群)(頻度 不明)

11.1.4 末梢神経障害

末梢性感覚ニューロパチー (<u>10.7%</u>)、末梢性ニューロパチー (<u>7.4%</u>)、<u>多発ニューロパチー (3.2%</u>)、末梢性感覚運動ニューロパチー (<u>1%未満</u>) 等があらわれることがある。 [7.6、7.9参照]

11.1.5 可逆性後白質脳症症候群 (頻度不明)

可逆性後白質脳症症候群(症状:痙攣発作、血圧上昇、頭 痛、意識変容、視覚障害等)があらわれることがある。

11.1.6 感染症 (27.2%)

帯状疱疹 (5.4%) 、肺炎 (4.2%) 等があわられることがあ る。

11.2 その他の副作用

	10%以上	5~10%未満	5%未満
血液/リ	好中球減少	<u>貧血</u>	白血球減少症、リンパ
ンパ系	症		球減少症、汎血球減少
			症

			1
神経系			浮動性めまい、錯感
			党、味覚異常、頭痛、
			<u>振戦、感覚鈍麻、傾眠、</u>
			注意力障害、嗜眠、味
			党減退、神経痛
眼		3	白内障、霧視、眼乾燥、
			結膜炎、眼刺激
血管			高血圧、深部静脈血栓
			症、潮紅、低血圧
呼吸器			咳嗽、呼吸困難、しゃ
			っくり、肺塞栓症、鼻
			出血、口腔咽頭痛
消化器	下痢		上腹部痛、腹痛、消化
	(26.0%)		不良、口内炎、腹部膨
	悪心		満、胃食道逆流性疾
	(25.6%)		患、口内乾燥、胃炎、
	嘔吐、便秘		腹部不快感、放屈、口
			腔内潰瘍形成
肝臟			ALT 增加、AL-P 增加、
			y -GTP 增加
皮膚	発疹	そう痒症	紅斑、薬疹、そう痒性
			皮疹、多汗症、紅斑性
			皮疹、剥脱性皮膚炎、
			全身性そう痒症、急性
			熱性好中球性皮膚症
			(Sweet 症候群) 、脱
			毛症

		·	,
<u>その他</u>	疲労	不眠症、筋痙	関節痛、筋力低下、倦
		縮、無力症、	<u>怠感、筋肉痛、体重増</u>
		末梢性浮腫、	加、高血糖、体重減少、
		発熱、食欲減	四肢痛、激越、気分変
		退	化、低カリウム血症、
			末梢腫脹、顔面浮腫、
			背部痛、易刺激性、イ
			ンフルエンザ様疾患、
			挫傷、錯乱状態、クッ
			シング様症状、うつ
			病、不安、血中クレア
			チニン増加、低カルシ
			ウム血症、気分動揺、
			動悸、腎不全、耳鳴、
			回転性めまい、疼痛、
			関節腫脹

13. 過量投与

13.1 処置

本剤は血液透析により除去されない。

14. 適用上の注意

14.1 薬剤調製時の注意

調剤時に脱カプセルをしないこと。

14.2 薬剤交付時の注意

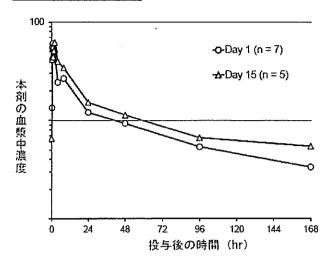
- 14.2.1 吸湿を防ぐため PTP 包装のまま保存し、服用時に PTP シートから取り出すように指導すること。
- 14.2.2 カプセルはつぶしたり、噛んだり、開けたりせず、そのまま水とともに服用するように指導すること。

16. 薬物動態

16.1 血中濃度

16.1.1 単独投与

再発又は難治性の多発性骨髄腫患者にイキサゾミブとして 1日1回4mgを週1回、3週間経口投与時^{注1)}の本剤の血漿 中濃度を測定した。1日目及び15日目共に、本剤の血漿中 濃度は投与後約2時間までに最高値に達し、その後多相性 の指数関数的な消失プロファイルを示した。投与15日目に おける本剤の終末相半減期は約 6 日であり、また、平均蓄 積比は約 2 であった¹⁾。



本剤の血漿中濃度推移(平均値)

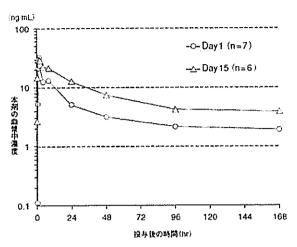
本剤の薬物動態パラメータ

パラメータ	1月日	15 日目
<u>N</u>	<u>7</u>	<u>5</u>
Tmax (hr) (hr)	1.08 (0.48-7.17)	1.83 (0.25-3.25)
Cmax (ng/mL)	<u>65.3 (61)</u>	68.8 (68)
AUC ₀₋₁₆₈ (ng·hr/mL)	1071 (79)	<u>1588 (60)</u>

幾何平均 (%変動係数)、注):中央値 (最小値, 最大値)、AUC₀₋₁₆₈: 投与後 168 時間までの血漿中濃度-時間曲線下面積、Cmax: 最高血 漿中濃度、Tmax: Cmax 到達時間

16.1.2 併用投与

再発又は難治性の多発性骨髄腫患者にレナリドミド及びデキサメタゾン併用下、イキサゾミブとして1日1回4mgを週1回、3週間経口投与時の本剤の血漿中濃度を測定した。1日目及び15日目共に、本剤の血漿中濃度は投与後約2時間までに最高値に達し、その後多相性の指数関数的な消失プロファイルを示した。投与15日目における本剤の終末相半減期は5.2日であり、また、平均蓄積比は1.78であった1)



本剤の血漿中濃度推移(平均値)

本剤の薬物動態パラメータ

パラメータ	1 日目	15 日目
N	7	6
T _{max} (hr) 造	1. 45 (1. 00-7. 17)	1. 38 (0. 47-7. 08)
C _{max} (ng/mL)	32. 9 (52)	34. 5 (95)
AUC ₀₋₁₆₈ (ng· hr/mL)	564 (41)	1086 (54)

幾何平均 (%変動係数)、注):中央値 (最小値,最大値)、AUC₀₋₁₆₈: 投与後 168 時間までの血漿中濃度ー時間曲線下面積、C_{max}:最高血 漿中濃度、T_{max}: C_{max}到達時間

16.2 吸収

16.2.1 食事の影響

本剤 $4 m g^{\pm 1}$ を進行がん患者 15 例に高脂肪食摂取後に投与した時の C_{max} 及び AUC は、空腹時投与時と比較してそれぞれ 69%、 $28%減少した <math>^{21}$ (外国人データ)。 [7.1 参照]

16.3 分布

本剤は高い血漿蛋白結合率 (99%) を示した。また、本剤は 赤血球に多く分布し、AUC に基づく血液-血漿分配比は約10 であった³ (外国人データ)。

16.4 代謝

- 16.4.1 本剤の放射性標識体を経口投与した時、血漿中に認められた放射能の70%を未変化体が占めていた⁴⁾ (外国人データ)。
- 16.4.2 臨床用量における血漿中濃度付近のイキサゾミブの代 謝には主に CYP 以外の蛋白が関与し、特定の CYP 分子種が関 与しないことが示唆された。 臨床用量における血漿中濃度よ

り高いイキサゾミブ濃度($10\,\mu\,\text{mol}/\text{L}$)では、各 CYP 分子種 の寄与率は CYP3A4 が 42.3%、1A2 が 26.1%、2B6 が 16.0%、2C8 が 6.0%、2D6 が 4.8%、2C19 が 4.8%、2C9 が 1%未満であった($in\ vitro$) 5 。

16.5 排泄

本剤の放射性標識体を進行がん患者 5 例に単回経口投与した時、投与後 34 日までに投与した放射能の 62%が尿中に、22%が糞中に排泄された。また、投与後 7 日までに尿中に回収された未変化体は投与量の 3.2%であった 4) (外国人データ)。

16.6 特定の背景を有する患者

16.6.1 腎機能障害患者

本剤 3mg ^{注1)} を重度腎機能障害(クレアチニンクリアランスが 30mL/min 未満)を有する患者 14 例又は血液透析を要する末期腎不全を有する患者 6 例に投与時の非結合型の AUC は、本剤 3mg を腎機能正常患者(クレアチニンクリアランスが 90mL/min 以上)18 例に投与した時と比較して 38%高かった。また、本剤は血液透析により除去されないことが示唆された⁷ (外国人データ)。 [9.2.1 参照]

16.6.2 肝機能障害患者

本剤 2. 3mg ^{注1)} を中等度肝機能障害 (総ビリルビン値が基準値上限の 1.5 倍超 3 倍以下)を有する患者 13 例及び本剤 1.5mg ^{注1)} を重度肝機能障害 (総ビリルビン値が基準値上限の 3 倍超)を有する患者 18 例に投与時の用量補正した非結合型の AUC は、本剤 4mg を肝機能正常患者 12 例に投与した時と比較してそれぞれ 32%及び 23%高かった ⁶⁾ (外国人データ)。 [9.3.1参照]

16.7 薬物相互作用

16.7.1 リファンピシン

リファンピシン 600mg を進行がん患者 16 例に 1 日 1 回反復 投与時に、本剤 4mg^{注1)}を併用投与した時、本剤の C_{teax} が 54%、 AUC が 74%減少した²⁾ (外国人データ)。 [10.2 参照]

16.7.2 その他の薬剤

クラリスロマイシン $500 \, \mathrm{mg}$ を進行がん患者 15 例に 1 日 2 回 反復投与時に、本剤 $2.5 \, \mathrm{mg}^{\pm 1}$ を併用投与した時、本剤の C_{max} 及び AUC に対する明確な影響は認められなかった(本剤の C_{max} が 4%減少、AUC が 11%増加した。) 2 (外国人データ)。 注 1)本剤の承認用法・用量はレナリドミド及びデキサメタゾンと

の併用の場合は1日1回4mgを週1回、3週間経口投与の後、13日間休薬、単独投与の場合は最初の4サイクルは1日1回3mg、5サイクル以降は1日1回4mgを週1回、3週間経口投与の後、13日間休薬である。

17. 臨床成績

17.1 有効性及び安全性に関する試験

〈再発又は難治性の多発性骨髄腫〉

17.1.1 国際共同第四相試験 (二重盲検比較試験)

1~3 レジメンの前治療歴を有する再発又は難治性の多発性 骨髄腫患者を対象に、レナリドミド^{注1)} 及びデキサメタゾン ^{注2)} の併用下で、プラセボを対照としてイキサゾミブとして 4mg ^{注3)} を経口投与した。なお、レナリドミド又はプロテア ソーム阻害剤に難治性の患者は対象から除外した。

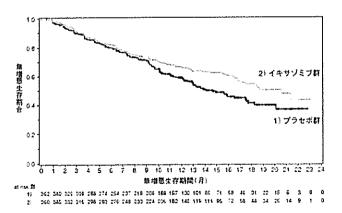
合計 722 例 (日本人 41 例を含む) が無作為割付され、主要 評価項目である無増悪生存期間 (PFS) は盲検化された独立 評価委員会 (IRC) により中央検査結果に基づき評価され、 イキサゾミブ投与群において有意な延長が認められた

(2014年10月30日データカットオフ)。

注 1) レナリドミドの用法・用量:28日間を1サイクルとし、1日1回25mgを1~21日目に連日経口投与した後、7日間(22~28日目)休薬した。

注 2) デキサメタゾンの用法・用量:28日間を1サイクルとし、1 日1回 40mgを1、8、15、22日目に経口投与した。

注 3) イキサソミブの用法・用量: 28 日間を 1 サイクルとし、1 日 1 回 4mg を 1、8、15 日目に経口投与した。



IRCの判定に基づく無増懲生存期間のKaplan-Meler曲線(ITT) (2014年10月30日データカットオフ)

国際共同第Ⅲ相二重盲検比較試験における有効性解析の要 約

	イキサゾミブ群 (n=360)	プラセボ群 (n=362)
PFS イベント数	129	157
無増悪生存期間の中央 値(月) (95%信頼区間)	20.6 (17.02~NE ^{注6)})	14. 7 (12. 91~17. 58)
p 値 ^{注 4)} (有意水準)	0.012 (0). 02268)
ハザード比 (95%信頼区 間) ^{注 5)}	0.742 (0.5	87~0. 939)

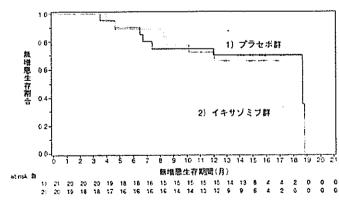
注 4) 無作為化の層別因子による層別ログランク検定

注 5) 無作為化の層別因子による層別 Cox 比例ハザードモデル

注 6) NE: Not Estimable (推定不能)

また、副次評価項目である全生存期間 (0S) の中間解析 (2015年7月12日データカットオフ) の時点で 0S イベント数はイキサゾミブ投与群で 81件、プラセボ投与群で 90件であり、0S は両群とも中央値に到達していない (ハザード比: 0.868、95%信頼区間: 0.642~1.175、p=0.359) (2015年7月12日データカットオフ)。

日本人部分集団 41 例(イキサゾミブ投与群 20 例、プラセボ投与群 21 例)における 2015 年 7 月 12 日データカットオフ時点の PFS イベント数はイキサゾミブ投与群で 7 件、プラセボ投与群で 8 件であり、PFS の中央値(95%信頼区間)は、イキサゾミブ投与群で 17.0 ヵ月(10.18~推定不能)、プラセボ投与群で 18.7 ヵ月(7.43~18.83)であった(ハザード比。1.323、95%信頼区間:0.443~3.954)(2015 年7月 12 日データカットオフ)⁸⁾。



IRCの判定に基づく無増悪生存期間のKaplan-Meier曲線(日本人部分集団) (2015年7月12日データカットオフ)

副作用発現頻度は、イキサゾミブ投与群で93% [335/361 例 (日本人20 例含む)]であった。主な副作用(20%以上) は、下痢[30%(110 例)]、好中球減少症[26%(93 例)]、 血小板減少症〔21% (77例)〕、疲労〔21% (75例)〕、便 秘〔20% (71例)〕であった(2015年7月12日データカットオフ)。

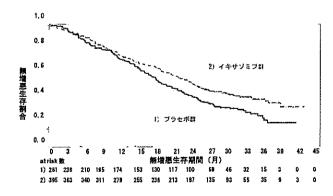
〈多発性骨髄腫における自家造血幹細胞移植後の維持療法〉

17.1.2 国際共同第四相試験 (二重盲検比較試験)

自家造血幹細胞移植(ASCT)後の初発の多発性骨髄腫患者を対象に注り、プラセボを対照としてイキサゾミブを経口投与した注り。なお、多発性骨髄腫が一次療法施行後に再発した患者、又は一次療法に無反応であった患者(ASCT 施行後に奏効が得られなかった患者を含む)は対象から除外した。合計656例(日本人22例を含む)が3:2の割合でイキサゾミブ又はプラセボに無作為割付され、主要評価項目である無増悪生存期間(PFS)は盲検化された独立評価委員会(IRC)により中央検査結果に基づき評価され、イキサゾミブ投与群において有意な延長が認められた(2018年4月16日データカットオフ)⁹⁾。

注7) 初回治療として緩解導入療法に続いて大量メルファラン療法 及び ASCT が実施され、部分奏効以上の奏効が得られた患者を対象 とした。

注8) イキサゾミブの用法・用量:28 日間を1サイクルとし、最初の4サイクルは、イキサゾミブ3mgを週1回(28 日サイクルの1、8及び15 日目)経口投与し、最初の4サイクル中に忍容性が認められれば、サイクル5の1日目に4mgへと増量した。なお、イキサゾミブ又はプラセボは、最長で約24ヵ月間、又は病勢進行若しくは忍容不能な毒性が確認されるまで(いずれか早い方まで)投与した。



IRC の判定に基づく 無項悪生存期間の Kaplan-Meier 曲線 (IIT) (2018 年 4 月 16 日データカットオフ)

国際共同第Ⅲ相二重盲検比較試験における有効性解析の要 <u>約</u>

イキサゾミブ群	プラセボ群
---------	-------

	(n=395)	(n=261)
PFS イベント数	198 (50%)	<u>156 (60%)</u>
無増悪生存期間の中央 値(月) (95%信頼区間)	$ \begin{array}{r} $	21. 3 (17. 97~24. 67)
p 値 ^{注 9)} (有意水準)	<u>0. 002</u>	(0.05)
ハザード比 (95%信頼区 <u>間) ^{注10)}</u>	0.720 (0.5	582~0.890)

注9) 無作為化の層別因子による層別ログランク検定

注 10) 無作為化の層別因子による層別 Cox 比例ハザードモデル 副作用発現頻度は、イキサゾミブ投与群で 78% [307/394 例 (日本人 13 例含む)] であった。主な副作用 (10%以上) は、悪心 [31% (124 例)] 、下痢 [22% (86 例)] 、嘔吐 [22% (86 例)] 及び疲労 [11% (45 例)] であった。

18. 薬効薬理

18.1 作用機序

イキサゾミブは20Sプロテアソームの β 5サブユニットに結合し、キモトリプシン様活性を阻害することにより、腫瘍細胞のアポトーシスを誘導し、腫瘍増殖を抑制すると考えられている $^{10,\ 11)}$ 。

18.2 抗腫瘍効果

18.2.1 ヒト多発性骨髄腫 (MM) 由来細胞株 (MM. 1S、NCI-H929、 RPMI-8226 等) 及び MM 患者由来の MM 細胞に対し増殖抑制作 用を示した (*in vitro*) ^{10, 11)}。

19. 有効成分に関する理化学的知見

一般的名称:イキサゾミブクエン酸エステル (Ixazomib Citrate) [JAN]

化学名: 2, 2'-{2-[(1於-1-({[(2,5-Dichlorobenzoyl) amino]acetyl}amino)-3-methylbutyl]

-5-oxo-1, 3, 2-dioxaborolane- 4, 4-diyl} diacetic acid

分子量:517.12

分子式: C₂₀H₂₃BCl₂N₂O₉

性状: イキサゾミブクエン酸エステルは白色〜ほとんど白色の 粉末である。ジメチルスルホキシドに極めて溶けやすく、テ トラヒドロフランにやや溶けやすく、アセトニトリル又は酢 酸エチルに極めて溶けにくい。

化学構造式:

融点:231℃(分解)

21. 承認条件

- 21.1 医薬品リスク管理計画を策定の上、適切に実施すること。 〈再発又は難治性の多発性骨髄腫〉
- 21.2 国内での治験症例が極めて限られていることから、製造 販売後、一定数の症例に係るデータが集積されるまでの間は、 全症例を対象に使用成績調査を実施することにより、本剤使 用患者の背景情報を把握するとともに、本剤の安全性及び有 効性に関するデータを早期に収集し、本剤の適正使用に必要 な措置を講じること。

22. 包装

患者さん用パッケージ付き PTP 1カプセル×1

23. 主要文献

- 1) イキサゾミブクエン酸エステルの薬物動態試験成績① (2017年3月30日承認,CTD 2.7.6.1) (社内資料)
- 2) イキサゾミブクエン酸エステルの薬物動態試験成績② (2017年3月30日承認,CTD 2.7.6.7) (社内資料)
- 3) イキサゾミブクエン酸エステルの薬物動態試験成績③(2017年3月30日承認,CTD 2.7.2) (社内資料)
- 4) イキサゾミブクエン酸エステルの薬物動態試験成績④ (2017年3月30日承認,CTD 2.7.6.9) (社内資料)
- 5) イキサゾミブクエン酸エステルの非臨床薬物動態試験成績 (2017年3月30日承認, CTD 2.6.4.5) (社内資料)
- イキサゾミブクエン酸エステルの薬物動態試験成績⑤(2017年3月30日承認,CTD 2.7.6.10) (社内資料)
- 7) イキサゾミブクエン酸エステルの薬物動態試験成績® (2017年3月30日承認, CTD 2.7.6.8) (社内資料)
- 8) イキサゾミブクエン酸エステルの第 III 相試験成績①

(2017年3月30日承認、CTD 2.7.6.5) (社内資料)

- 9) イキサゾミブクエン酸エステルの第 III 相試験成績②(申 請時, CTD 2.7.6.1) (社内資料)
- 10) イキサゾミブクエン酸エステルの非臨床薬理試験成績 (2017年3月30日承認, CTD 2.6.2) (社内資料)
- 11) Chauhan D. et al.: Clin. Cancer Res. 2011;17 (16): 5311-5321.

24. 文献請求先及び問い合わせ先

武田薬品工業株式会社 くすり相談室 〒103-8668 東京都中央区日本橋本町二丁目1番1号 フリーダイヤル 0120-566-587 受付時間 9:00~17:30 (土日祝日・弊社休業日を除く)

26. 製造販売業者等

26.1 製造販売元

武田薬品工業株式会社

〒540-8645 大阪市中央区道修町四丁目1番1号

添付文書(案)

2020年2月作成

下線部分:公知申請に伴う変更箇所

貯法:2~8℃に保存 有効期間:2年 日本標準商品分類番号 874213

| 承認番号 | 21800AMY10108 | 販売開始 | 2009年3月

造血幹細胞移植前治療薬 注射用ブスルファン

ブスルフェクス[°]点滴静注用 **60**^{mg} Busulfex injection 60^{mg}

劇薬、処方箋医薬品^{注)} 注)注意—医師等の処方箋により使用すること

1. 警告

- 1.1 造血幹細胞移植の前治療に本剤を投与する場合には、緊急時に十分対応できる医療施設において、造血幹細胞移植に十分な知識と経験をもつ医師のもとで、適切と判断される患者にのみ実施すること。また、治療開始に先立ち、患者又はその家族に有効性及び危険性を十分説明し、同意を得てから投与すること。
- 1.2 本剤を小児に投与する場合には、小児のがん化学 療法に十分な知識と経験をもつ医師のもとで実施す ること。
- 1.3 本剤の使用にあたっては、慎重に患者を選択すること。
- 2. 禁忌(次の患者には投与しないこと)
- 2.1 重症感染症を合併している患者[感染症が増悪し 致命的となることがある。][11.1.2 参照]
- 2.2 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者
- 2.3 妊婦又は妊娠している可能性のある女性[9.5 参 ||||]

3. 組成・性状

3.1 組成

販売名	有効成分	添加剤
ブスルフェクス	1バイアル10mL中	ポリエチレングリコール400
点滴静注用60mg	プスルファン60mg	6.67mL
	-	N,N-ジメチルアセトアミド
		3.33mL

3.2 製剤の性状

本剤は、無色澄明の液である。

4. 効能又は効果

- ○同種造血幹細胞移植の前治療
- ○ユーイング肉腫ファミリー腫瘍、神経芽細胞腫<u>、悪性リンパ腫</u>における自家造血幹細胞移植の前治療
- 6. 用法及び用量
- 〈同種造血幹細胞移植の前治療、ユーイング肉腫ファミリー腫瘍及び神経芽細胞腫における自家造血幹細胞移植の前治療〉

他の抗悪性腫瘍薬との併用において、成人にはA法又は B法、小児にはC法を使用する。なお、患者の状態によ り適宜減量する。

〈悪性リンバ腫における自家造血幹細胞移植の前治療〉 他の抗悪性腫瘍薬との併用において、成人にはA法又は B法を使用する。なお、患者の状態により適宜減量する。

成人	A 注: ブスルファンとして	T1回0.8mg/kgを2時間かけ	
~~		は6時間毎に1日4回、4日間	
	投与する。		
	B法:プスルファンとして1回3.2mg/kgを3時間かけ		
	て点滴が注する。本剤は	1日1回、4日間投与する。	
小児		て以下の体重別の投与量を2	
	時間かけて点滴静注する。本剤は6時間毎に1日4		
	回、4日間投与する。		
	実体重 本剂投与量(mg/kg)		
	9kg未満 1.0		
	9kg以上16kg未満	1.2	
	16kg以上23kg以下 1.1		
	23kg超34kg以下 0.95		
	34kg超	0.8	

7. 用法及び用量に関連する注意

〈効能共通〉

- 7.1 肥満患者(BMIが25以上)では投与量が過多にならないように、標準体重から換算した投与量を考慮すること。 〈同種造血幹細胞移植の前治療、ユーイング肉腫ファミリー腫瘍及び神経芽細胞腫における自家造血幹細胞移植の前治療〉
- 7.2 シクロホスファミド、メルファラン又はフルダラビンとの併用以外での有効性及び安全性は確立されていない。[17.1.1-17.1.3 参照]

8. 重要な基本的注意

- 8.1 本剤の使用にあたっては、患者の状態及び臓器機能 (心、肺、肝、腎等)を十分検討し、造血幹細胞移植を 実施可能と判断される患者にのみ投与し、以下の事項 について特に注意すること。
 - ・本剤の投与中は心電図、血圧及び尿量等のモニター を行うこと。また、投与後は定期的に臨床検査(血液 検査、肝機能検査、腎機能検査等)及び尿量のモニ ター等を行うこと。
 - ・本剤の投与後は患者の状態を十分に観察し、致命的 な感染症の発現を抑制するため、抗菌剤投与等の感 染症対策を行い、適切な無菌管理を行うこと。
 - ・本剤の投与後は輸血及び造血因子の投与等適切な支 持療法を行うこと。
- 8.2 本剤の投与により痙攣を起こす可能性があるため、 あらかじめ抗痙攣薬の使用を考慮するなどの適切な措 置を講ずること。[11.1.4 参照]
- 8.3 静脈閉塞性肝疾患があらわれることがあるので、観察を十分に行い、静脈閉塞性肝疾患の症状としてあらわれる体重増加、肝腫大又は肝の圧痛、腹水、黄疸等に注意すること。[9.3、11.1.1 参照]
- 8.4 本剤をB法で使用する際には、関連文献(「医療上の必要性の高い未承認薬・適応外薬検討会議 公知申請への該当性に係る報告書:ブスルファン(新用法・用量の追加)リー等)を熟読すること。
- 8.5 本剤を悪性リンパ腫における自家造血幹細胞移植の 前治療に使用する際には、関連文献(「医療上の必要性 の高い未承認薬・適応外薬検討会議 公知申請への該当 性に係る報告書:ブスルファン(悪性リンパ腫における 自家造血幹細胞移植の前治療)2-1等)を熟読すること。

- 9. 特定の背景を有する患者に関する注意
- 9.1 合併症・既往歴等のある患者
- 9.1.1 心機能障害のある患者

心機能障害が増悪するおそれがある。

9.1.2 肺障害のある患者 肺障害が増悪するおそれがある。

9.1.3 感染症を合併している患者

感染症が増悪し致命的となることがある。[11.1.2 参照]

9.2 腎機能障害患者

腎機能障害が増悪するおそれがある。

9.3 肝機能障害患者

肝機能障害が増悪するおそれがある。[8.3、11.1.1 参 照]

9.4 生殖能を有する者

- 9.4.1 妊娠可能な女性に対して、本剤投与中及び投与終 了後一定期間は適切な避妊を行うよう指導すること。 [9.5 参照]
- 9.4.2 パートナーが妊娠する可能性のある男性に対して、 本剤投与中及び投与終了後一定期間は適切な避妊を行 うよう指導すること。[15.2.1 参照]
- 9.4.3 小児及び生殖可能な年齢の患者に投与する必要がある場合には、性腺に対する影響を考慮すること。

9.5 妊婦

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には投与しないこと。動物実験(マウス、ラット、ウサギ)で胎児あるいは出生児において筋骨格系の異常、性腺の発育障害、体重・体長の減少及び生殖機能への影響が認められたとの報告がある³。[2.3、9.4.1 参照]

9.6 授乳婦

授乳しないことが望ましい。ヒト乳汁中への移行については不明である。また、非臨床試験等のデータはなく、ヒトで哺乳中の児における影響は不明である。 [15.2.1 参照]

9.7 小児等

本剤を前治療薬として用いた造血幹細胞移植を小児に施行するにあたっては、歯牙形成不全を含む成長障害等4.50の可能性を十分に考慮した上で行うこと。小児55例(年齢0~18歳未満)を対象とした海外臨床試験において、小児に特徴的な副作用と考えられる症状等は認められなかった。[17.1.3 参照]

0 8 查验去

患者の状態を観察しながら慎重に投与すること。一般 に生理機能が低下している。

10、相互作用

10.2 併用注意(併用に注意すること)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序·危険因子
イトラコナゾール [©]	本剤の血漿中濃度が	機序は不明である。
	上昇し、本剤の作用	
	が増強することがあ	
	る。	
メトロニダゾール①	本剤の血漿中濃度が	機序は不明である。
	上昇し、本剤の作用	
	が増強することがあ	
	る。	

11 割作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分 に行い、異常が認められた場合には投与を中止するな ど適切な処置を行うこと。

11.1 重大な副作用

11.1.1 静脈閉塞性肝疾患(7.5%)

[8.3、9.3 参照]

11.1.2 感染症(22.5%)、出血(頻度不明)等

本剤投与後は重度の骨髄抑制状態となり、その結果感染症及び出血等を引き起こし、致命的となることがあるので、本剤の投与後は患者の状態を十分に把握して適切な処置を行うこと。[2.1、9.1.3 参照]

11.1.3 ショック、アナフィラキシー(頻度不明)

11.1.4 痙攣(頻度不明)

ブスルファンは髄液移行性が高く、あらかじめ抗痙攣 薬が投与されていない場合は10%以上の患者で痙攣が起 こるとの報告がある⁸⁾。国内及び海外臨床試験(成人)で はあらかじめフェニトインが投与され、132例中1例に 痙攣が発現した。海外臨床試験(小児)ではあらかじめ ベンゾジアゼビン系の抗痙攣薬が投与され、55例中2例 に痙攣が発現した。[8.2 参照]

11.1.5 肺胞出血・喀血(2.1%)、急性呼吸窮迫症候群 (1.6%)、間質性肺炎(1.1%)、呼吸不全(1.1%)

11.1.6 心筋症(頻度不明)

11.1.7 胃腸障害

口内炎・舌炎(84.0%)、嘔吐(71.1%)、悪心(68.4%)、 食欲不振(56.1%)、下痢・軟便(54.5%)が高頻度にあら われる。

11.2 その他の副作用

			5%未満	頻度不明
肝臟	ALT上昇	y-GTP上	LDH上昇、肝機能	
			異常、黄疸、肝臟	
	ビリルビ	昇、肝腫大	痛、門脈圧亢進症、	
	ン上昇、		門脈狭窄	
	AST上昇			
血液			APTT延長、牌腫、	
		球減少症	FDP上昇、プロト	
			ロンビン時間延長、	
			アンチトロンビン	
			Ⅲ低下、凝血異常、	
			血栓性微小血管症、	
			血中フィブリノゲ	
			ン上昇、血中フィ	
			ブリノゲン低下、	
			白血球增多、有熱	
			性骨髓無形成	
免疫			免疫グロブリン低	
		主病	下、生着症候群、	
			骨髓移植拒絶反応	
呼吸器			咽頭紅斑、咳嗽、	
		界出血	呼吸困難、ラ音、	
			鼻閉、胸水、鼻漏、	
			咽喉頭不快感、呼	
			吸音減弱、咽喉乾	
			燥、上気道炎、鼻	
			乾燥、頻呼吸、副	
			鼻腔うっ血、副鼻	
			腔不快感、無気肺、	
			嗄声、 嚥下性肺炎	
循環器			類脈、血圧上昇、	
			血圧低下、起立性	
			低血圧、心拡大、	
			徐脈	

	20%以上	5~20%未満	5%未満	類度不明
消化器	腹痛		腹部膨満、吐血、 しゃっくり、舌苔、	
			腹部不快感、便秘、	
			痔核、食道炎、直 腸炎、嚥下障害、	
			DE DE DE TENT	
			膜出血、唾液過多、 胃炎、鼓腸、直腸	
			出血、マロリー・	
			ワイス症候群、メ レナ、胃酸過多、	
			胃前庭部毛細血管	
			拡張症、胃腸出血、 口内乾燥、口内水	
			疱、菌肉出血、出 血性胃炎、食道箱、	
			食道不快感、蛋白	
			滿出性胃腸症、腸 炎、腸葉音異常、	
			裂肛、膝炎	
精神· 神経系			不眠症、錯乱状態、 振戦、しびれ感、	
		γ,	恶夢、肝性腦症、 激越、失見当識、	
			脳出血、譫妄	
腎臓・ 泌尿器			血尿、出血性膀胱 炎 、排 尿 图 難 、	
CCANAGE		乏尿	BUN上昇、腎機能	
			障害、蛋白尿、膀 胱炎、BUN低下、	
			前立腺炎、多尿、	
			尿意切迫、尿阴、 膀胱痛	
皮膚			色素沈着、そう痒 症、皮膚落屑、皮	
		出血	膚障害、皮脂欠乏	
代謝	血清マグ	血 上昇、	症、皮膚乾燥 血清 総蛋白低下、	
1 41.27	ネシウム	血清カルシ	体液貯留、血清ナ	
	低 ト、 眼 清カリウ	血清アルブ	トリウム低下、血 清リン上昇、血清	
	ム低下		カリウム上昇、ト リグリセリド上昇、	
		下	血治クロル上昇、	
			血清クロル低下、 血清ナトリウム上	
			界、脱水、電解質	
筋骨格			失調、尿酸上昇 関節痛、筋痛、背	
			部痛、防痙攣、四 肢痛、頸部痛、顎	
			痛、顏面痛、骨痛、	
感覚器		味覚異常	段部 新 口内異常感、耳痛、	
			耳鳴	
眼			霧視、角膜炎、眼 そう痒、眼球乾燥、	
			眼充血、眼瞼炎、 強膜浮腫、結膜炎、	
			結膜出血、羞明	
その他	発熱(38.50公)	浮殖、脱力、 体重增加	体重減少、ほて り・潮紅、悪寒、	無月経、早 発開経 - 即
	(30.370/、 倦怠感	IT ASSEMI	CRP上昇、不正子	巣 機 能 不
			宫出血、灼熱感、 腔出血、圧迫感、	全、非果障害、性腺機
			胸痛、胸部不快感、	能低下、乏
			粘膜過形成、白血 球AI-P上昇、冷	
L		<u> </u>		巣萎縮

注)同種・自家移植を対象とした国内第Ⅱ相試験 (KRN246/01-A01)、自家移植を対象とした海外第 Ⅲ相試験(OMC-BUS-3)、同種移植を対象とした海 外第Ⅱ相試験(OMC-BUS-4)及び小児における同種・自家移植を対象とした海外第Ⅱ相試験(F60002IN101G0)の集計。

13. 過量投与

13.1 処置

プスルファンは透析により除去可能であるとの報告があることから、過量投与の場合透析を考慮すること⁹。

14. 適用上の注意

14.1 薬剤調製時の注意

- 14.1.1 本剤は細胞毒性を有するため、調製時には手袋、 マスク、防護メガネ等を着用し、十分に注意すること。 皮膚、粘膜、眼等に本溶液が付着した場合には、直ち に多量の流水でよく洗うこと。
- 14.1.2 本剤は10倍量の生理食塩液又は5%ブドウ糖液に添加し、十分に混和して使用すること。
- 14.1.3 本剤は希釈後、安定性が低下するので、室温(約25℃)で用時調製し、調製から8時間以内に投与を終了すること。
- 14.1.4 調製後に混濁又は結晶が認められる場合は使用しないこと。
- 14.1.5 ポリカーボネート製の容器・シリンジ等及びポリエーテルスルホン製のシリンジフィルターは使用しないこと。

14.2 薬剤投与時の注意

- 14.2.1 他の注射剤との配合又は混注は行わないこと。
- 14.2.2 インラインフィルターを用いて、又は点滴用セットにフィルターを装着して本利を投与する場合は、ボリエーテルスルホン製、ボリスルホン製又はボリエステル製のフィルターを使用すること。
- 14.2.3 ポリカーボネート製の三方活栓や延長チューブ等を使用した場合、そのコネクター部分にひび割れが発生し、血液及び薬液漏れ、空気混入等の可能性があるので注意すること。
- 14.2.4 直接末梢静脈に投与すると薬液の漏出による局所 の組織障害を起こすことがあるので、必ず中心静脈か らの点滴静脈内投与とし、皮下、筋肉内には投与しな いこと。

中心静脈カテーテルを留置して投与すること。

14.2.5 本剤の投与においては希釈調製された全量が1回2時間(A法及びC法)又は1回3時間(B法)で投与されるよう、持続注入ポンプを用いて点滴静脈注射すること。

15. その他の注意

15.1 臨床使用に基づく情報

- 15.1.1 添加剤であるN,N-ジメチルアセトアミド(DMA) は、海外臨床試験において、肝トランスアミナーゼの上昇を伴う肝毒性及び幻覚等の神経毒性が報告されている¹⁰。
- 15.1.2 プスルファンを投与した患者に二次発がんが認められたとの報告がある $^{\Box}$ 。

15.2 非臨床試験に基づく情報

- 15.2.1 ブスルファンは、遺伝毒性が報告されている³⁾。 [9.4.2、9.6 参照]
- 15.2.2 動物実験(ラット)でのDMA 2g/kgの単回腹腔内投与、1g/kgの経皮投与において胎児への催奇形性が認められたとの報告がある10。
- 15.2.3 ブスルファン投与により、動物実験において雄 ラットの不妊の誘発、精子形成阻害、また、マウスの 卵母細胞の減少が認められたとの報告がある³⁾。
- 15.2.4 プスルファン投与により、動物実験(マウス、 ラット)においてがん原性が示唆されたとの報告がある^山。

16. 薬物動態

16.1 血中濃度

16.1.1 単回及び反復投与

(1) 成人

悪性腫瘍患者に、1回0.8mg/kgの用量で6時間毎に1日4回、4 日間静脈内投与した時、血漿中未変化体濃度は、投与時間の 経過とともに上外し、投与終了直前でCmaxが観察され、投与終 了後速やかに減少した(図16-1)。

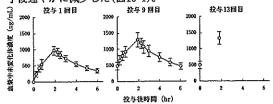


図16-1 血漿中ブスルファン濃度の推移(平均値±標準偏差)

薬物動態パラメータは表16-1のとおりであり、反復投与による薬物動態の変動はみられなかった。他の報告においても、同様の薬物動態パラメータの値が示されている12-10。

表16-1 ブスルファンの薬物動態パラメータ

3X10-1	レノヘ	NITIO	32-10 BUXX / \ ,	77-7		
投与 回数	例数	C _{max} (ng/mL)	t1/2 (hr)	l (umal -	CL/ABW ^{b)} (mL/min/kg)	
1回日	29	994 ± 123	2.66 ± 0.40	1171 ± 220	2.66 ± 0.44	0.60 ± 0.05
9回日	28c)	1311 ± 192	2.86 ± 0.38	1242 ± 206	2.46 ± 0.37	0.60 ± 0.07

(平均值±標準偏差)

a) 投与1回目はAUC₀-∞を、投与9回目はAUCssをそれぞれ示す。

b) ABWは実体重を示す。

c)投与9回目のCmaxについては29例である。

(2) 小児

悪性腫瘍又は非悪性腫瘍患者に、1回0.8~1.2mg/kgの用量で6時間毎に1日4回、4日間静脈内投与した時、血漿中未変化体 濃度を用いて算出した薬物動態パラメータは表16-2のとおり である。反復投与による薬物動態の変動はみられなかった¹⁵⁾ (外国人データ)。

表16-2 ブスルファンの薬物動態パラメータ

3010-2	35.10-2 ノスルファンの架物跳然ハラスータ						
体重	投与艦 (mg/kg)	例数	投与 回数	t1/2 (hr)	AUC (µmol· min/L)	CL/ABW ²⁾ (mL/min/kg)	Vz/ABW ^{b)} (L/kg)
体重< 9kg	1.0	8	1回目 9回目 13回目	2.08±0.242 2.36±0.357 2.35±0.263	1270 ± 253	3.74±0.734 3.30±0.559 3.33±0.742	0.68±0.182
9kg≤ 体重< 16kg	1.2	14	1回目 9回目 13回目	2.18±0.300	1269 ± 204	4,31±0,693 3,92±0,658 3,93±0,744	0.73±0.079
16kg≤ 体重≤ 23kg	1.1	14	1回目 9回目 13回目	2.46±0.385	1273±234	3.89±0.524 3.61±0.597 3.56±0.627	0.76±0.066
23kg< 体重≤ 34kg	0.95	6	1回日 9回日 13回日	2.52±0.291	1230 ± 97	3.42±0.108 3.09±0.170 2.97±0.201	0.67±0.069
体重> 34kg	0.8	13	1回目 9回日 13回目	2.93±0.513	1323 ± 177	2.73±0.398 2.49±0.298 2.49±0.377	0.62±0.053

(平均値±標準偏差)

母集団解析で得られた推定値を示した。

a) ABWは実体重を示す。

も)母集団解析時に時期間変動を考慮していないため、いずれの投与回 においても同一の値を示した。

16.4 代謝

ブスルファンは、グルタチオンS-トランスフェラーゼ(GST) によるグルタチオン抱合を第一段階とする代謝あるいは内因性物質との非特異的アルキル化による共有結合生成によって不活化される16.12(外国人データ)。

17、臨床成績

17.1 有効性及び安全性に関する試験

〈同種造血幹細胞移植の前治療〉

17.1.1 国内第 I 相試験

・造血器腫瘍患者28例(小児3例を含む)を対象とした非盲検試験において、本剤0.8mg/kgを点滴静注により6時間毎に計16回、移植施行日(day0)のday-7からday-4に4日間連日投与し、その後シクロホスファミド60mg/kgを1日1回、day-3からday-2に2日間連日投与した後(BU/CY2レジメン)、day0に造血幹細胞が輸注された。27例中8例が非血縁ドナーからの移植であったほかは、血縁ドナーからの移植であった。HLA適合度は、血清型では全例一致していたが、1例のみ遺伝子型一座不一致非血縁ドナーからの移植であった。また、27例中10例が末梢血幹細胞移植であり、その他の症例は骨髄移植であった。

同種移植における患者背景を表17-1、主要な有効性に関する臨床試験成績を表17-2に示す¹³⁾。

男17-1 国内臨床討論の頁年期

原疾患	同種移植
合計(%)	27(100)
急性白血病	16(59.3)
慢性骨髓性白血病	5(18.5)
悪性リンパ腫	3(11.1)
骨髓異形成症候群	3(11.1)

表17-2 国内臨床試験成績

	同種移植
骨髓抑制率	100%(27/27例)
生着率	96.3%(26/27例)
生着日数a)	14日(9~20日)
100日生存率的	96.0%

a) 造血幹細胞移植後生着までに要した日数の中央値(範囲)

b) Kaplan-Meier推定

副作用発現頻度は、27例中27例(100%)であった。主な副作用 は、嘔吐18例(66.7%)、下痢18例(66.7%)、悪心17例(63.0%)、 口内炎17例(63.0%)、食欲不振17例(63.0%)及び倦怠感14例 (51.9%)であった。[7.2 参照]

・同試験に組み入れられた18歳未満の小児3例の試験成績を表 17-3に示す¹³⁾。本試験での本剤の投与量は、0.8mg/kg/回 であった。

表17-3 国内臨床試験成績(小児)

原疾患	体重	移植種	骨髓抑制	生着日数b)	生存日数d)
总性骨髓性白血病	43.2kg	同種移植	-3 H	13日	50日÷
急性骨髓性白血病	17.8kga)	同種移植	0日	15∄	100日+
慢性骨髓性白血病	46.7kg	同種移植	2 日	—)	28 H ÷

a) 当該症例における本剤の投与量は、小児に対する実体重別の承認用法・用量(1.1mg/kg/回)とは異なる。

b)造血幹網胞移植後生着までに要した日数

c)移植後28日時点で生着不全と判断された。

d) 最終観察日を記載した。

骨髄移植拒絶反応(生着不全)が重篤な副作用として3例中1例 (33.3%)に認められた。[7.2 参照]

17.1.2 海外第 1 相試験

造血器腫瘍患者61例を対象とした非盲検試験において、本剤の有効成分であるブスルファン0.8mg/kgを点滴静注により6時間毎に計16回、移植施行日(day0)のday-7からday-4に4日間連日投与し、その後シクロホスファミド60mg/kgを1日1回、day-3からday-2に2日間連日投与した後(BU/CY2レジメン)、day0に造血幹細胞が輸注された。全例とも血縁ドナーからの移植であり、HLA適合度は、血清型では全例一致していた。また、61例中34例が末梢血幹細胞移植であり、その他の症例は骨髄移植であった。

同種移植における思者背景を表17-4、主要な有効性に関する 臨床試験成績を表17-5に示す¹³。

表17-4 海外臨床試験の原疾患

原疾患	同種移植	
合計(%)	61 (100)	
急性白血病	26(42.6)	
慢性骨髓性白血病	17(27.9)	
悪性リンパ腫	9(14.8)	
骨髓異形成症候群	9(14.8)	

表17-5 海外臨床試験成績

	同種移植	
骨髓抑制率	100% (61/61例)	
生着半	98.4%(60/6169)	
生着日数a)	13日(9~29日)	
100日生存率的	81.5%	

- a) 造血幹細胞移植後生着までに要した日数の中央値(範囲)
- b) Kaplan-Meier推定

副作用発現頻度は、61例中61例(100%)であった。主な副作用は、甌気57例(93.4%)、白血球減少症56例(91.8%)、血小板減少症55例(90.2%)、嘔吐54例(88.5%)、貧血53例(86.9%)、粘膜の炎症49例(80.3%)、食欲不振40例(65.6%)、下痢38例(62.3%)、顆粒球減少症32例(52.5%)及び低マグネシウム血症32例(52.5%)であった。[7.2 参照]

〈同種造血幹細胞移植の前治療、ユーイング肉腫ファミリー腫瘍 及び神経芽細胞腫における自家造血幹細胞移植の前治療〉

17.1.3 海外第Ⅱ相試験

造血器腫瘍患者58例(同種及び自家造血幹細胞移植:年齢0~18 歳未満)を対象とし本剤の目標AUC値を900~1350μmol·min/L と設定し、シクロホスファミド又はメルファランを併用した 前治療の非盲検試験が実施された。

同種移植は、28例中5例が非血縁ドナーからの移植であったほかは、血縁ドナーからの移植であった。HLA適合度は、26例で一致していたが、1例が二座不一致血縁ドナーであり、残る1例は一座不一致非血縁ドナーからの移植であった。

同種移植では、本剤の有効成分であるブスルファン0.8~1.2mg/kg(承認用法・用量と同一の体重別投与量設定)を点滴静注により6時間毎に計16回、移植施行日(day0)のday-9からday-6に4日間連日投与し、その後シクロホスファミド50mg/kgを1日1回、day-5からday-2に4日間連日投与した後(BU/CY4レジメン)、day0に造血幹細胞が輸注された。自家移植では、ブスルファン0.8~1.2mg/kg(承認用法・用量と同一の体重別投与量設定)を点消静注により6時間毎に計16回、移植施行日(day0)のday-6からday-3に4日間連日投与し、その後メルファラン140mg/m²を1回、day-1に投与した後(BU/L-PAMレジメン)、day0に造血幹細胞が輸注された。同種移植では28例中27例が骨髄移植であり、残る1例は末梢血幹細胞移植であった。自家移植では全例が末梢血幹細胞移植であった。

本試験の患者背景を表17-6、主要な有効性に関する臨床試験 成績を表17-7に示す¹³。

なお、自家移植27例の観察期間中央値は16.9ヵ月(範囲:5.4~26.5ヵ月)であり、神経芽細胞腫24例での2年再発率^由及び無事象生存率⁽¹⁾は、それぞれ31%及び50%、ユーイング肉腫ファミリー腫瘍3例での1年再発率⁽¹⁾及び無事象生存率⁽²⁾は、0%及び67%であった。

注)Kaplan-Meier推定

表17-6 海外臨床試験の原疾患

原疾患	同種移植	自家移植
合計(%)	28(100)	27(100)
急性骨髓性白血病	14(50.0)	
急性リンパ性白血病	1(3.6)	_
慢性骨髓性白血病	3(10.7)	-
骨髓異形成症候群	1(3.6)	_
貸状赤血球症	5(17.9)	-
サラセミア	1(3.6)	<u> </u>
Wiskott-Aldrich症候群	2(7.1)	-
白血球接着不全症	1(3.6)	
神経芽細胞腫	<u> </u>	24 (88.9)
ユーイング肉腫	_	3(11.1)

表17-7 海外臨床試験成績

	同種移植	自家移植
骨髓抑制率	100%(28/28例)	100% (27/27例)
生着率	100% (28/28%)	100% (27/27例)
生着日致a)	21日(12~47日)	11日(10~15日)
100日生存率ы	100%	100%

a) 造血幹網胞移植後生着までに要した日数の中央値(範囲) b) Kaplan-Meier排定

碉作用発現頻度は、同種移植で28例中19例(67.9%)、自家移植で27例中27例(100%)であった。主な閘作用は、阿種移植で口内炎12例(42.9%)、食欲不振9例(32.1%)、ALT上昇9例(32.1%)、γ-GTP上昇8例(28.6%)、AST上昇8例(28.6%)及び嘔吐6例(21.4%)、自家移植で口内炎26例(96.3%)、嘔吐19例(70.4%)、食欲不振18例(66.7%)、発熱性好中球減少症17例(63.0%)、下痢16例(59.3%)、AST上昇15例(55.6%)、ALT上昇14例(51.9%)及び腹痛14例(51.9%)であった。[7.2、9.7 参照]

18. 薬効薬理

18.1 作用機序

細胞内に取り込まれた後にDNA鎖用又はDNA鎮内架橋形成な どを介して細胞増殖を抑制し、骨髄抑制作用や抗腫瘍作用を 示す。

18.2 骨髓抑制作用

マウスにおいて好中球、リンパ球を含む血球数及び骨髄中造血細胞数の減少を認め18.19、イヌにおいても血球数の減少を認めた。

18.3 抗腫瘍作用

種々のヒト腫瘍細胞株に対して増殖抑制を認めた²⁰⁻²³ (in vilro)。急性リンパ性白血病細胞移植マウスに10及び20mg/kg を3日間腹腔内投与したところ腫瘍増殖を抑制し、対照群と比較してそれぞれ25%及び36%の平均生存期間を延長させた²¹。

19. 有効成分に関する理化学的知見

一般名: プスルファン[Busulfan(JAN)]

化学名: Tetramethylenedimethanesulfonate

分子式: C₆H₁₄O₆S₂ 分子圖: 246.30

性 状:白色の結晶性の粉末である。ジエチルエーテルに溶けにくく、エタノール(95)に極めて溶けにくく、水

けにくく、エタノール(95)に極めて沿げにくく にほとんど溶けない。

磁告式:

融 点:115~118℃

22. 包装

10mL×1パイアル

23. 主要文献

- 1) 医療上の必要性の高い未承認薬・適応外薬検討会議 公知申 請への該当性に係る報告書: ブスルファン(新用法・用量の 追加)
- 2) 医振上の必要性の高い未承認薬・適応外薬検討会議 公知申 請への該当性に係る報告書:ブスルファン(悪性リンパ腫に おける自家造血幹網胞移植の前治療)
- 3) Bishop, J. B. et al.: Mutat Res. 1986; 168(1): 15-45.
- Nishimura, S. et al.: Eur J Cancer Care. 2013; 22(3): 353-360.
- Dai, Q. Y. et al.: Bone Marrow Transplant. 2004; 34(8): 667-673.
- 6) Buggia, I. et al.: Anticancer Res. 1996; 16(4A): 2083-2088
- 7) Nilsson, C. et al.: Bone Marrow Transplant. 2003: 31(6): 429-435.
- Santos, G. W.: Bone Marrow Transplant. 1989;
 4(Suppl.1): 236-239.
- Stein, J. et al.: Bone Marrow Transplant. 2001; 27(5): 551-553.

- <u>10</u>) Weiss, A. J. et al.: Cancer Chemother Rep. 1962; 16: 477-485.
- 11) IARC Monographs. 1987; Suppl.7: 137-139.
- 12) Kennedy, G. L. Jr.: Critical Rev Toxicol. 1986; 17(2): 129-182.
- 13) 社内資料: 国内臨床試験成績(2006年10月20日承認、 CTD2.7.6.2)
- 14) Andersson, B. S. et al.: Biol Blood Marrow Transplant. 2002; 8(3): 145-154.
- 15) 社内資料:海外臨床試験(小児)成績(2006年10月20日承認、 CTD2.7.6.2)
- 16) Hassan, M. et al.: Drug Metab Dispos. 1987; 15(3): 399-402.
- 17) Hassan, M. et al.: Eur J Clin Pharmacol. 1989: 36(5): 525-530.
- 18) Gibson, F. M. et al.: Int J Exp Pathol. 2003; 84(1): 31-47.
- 19) Fried, W. et al.: Exp Hematol. 1985: 13(Suppl.16): 49-56.
- 20) Hoffman, R. et al.: Br J Cancer. 1989; 59(3): 347-348.
- 21) Sanderson, B. J. S. et al.: Environ Mol Mutagen. 1991; 17(4): 238-243.
- 22) Teicher, B. A. et al.: Cancer Res. 1986; 46(9): 4379-4383
- 23) Pacheco, D. Y. et al.: Cancer Res. 1990; 50(23): 7555-7558
- 24) Fichtner, I. et al.: Eur J Cancer. 2003; 39(6): 801-807.
- 24. 文献請求先及び問い合わせ先

大塚製薬株式会社 医薬情報センター 〒108-8242 東京都港区港南2-16-4 品川グランドセントラルタワー 電話 0120-189-840 FAX 03-6717-1414

26. 製造販売業者等

26.1 製造販売元

大塚製薬株式会社 Ofsuka 東京都千代田区神田司町2-9